

2019 1

J A P A N
APIC

No.008

Since 1975



01 ごあいさつ

【特集】 佐原体験 — SAWARA EXPERIENCE —

インタビュー

03 株式会社エヌアイデイ 取締役最高顧問

小森 孝一 氏

09 第三回日本体験プロジェクト「Sawara Experience」開催

11 第四回「Sawara Experience」～佐原の大祭 秋祭り～

太平洋事業

13 太平洋諸国リーダー招聘計画
ミクロネシア・チューク州
若手リーダー招聘計画（グループ①）

15 太平洋諸国リーダー招聘計画
ミクロネシア・チューク州
若手リーダー招聘計画（グループ②）

17 上智大学ミクロネシア・エキスポージャーツアー

19 ミクロネシア短期大学・学生招待計画
上智大学及び麗澤大学にて短期留学の受け入れ

21 日本・ミクロネシア連邦外交関係樹立 30 周年
記念式典での写真展

22 東洋大学にてミクロネシア写真展「南洋の光」開催

カリブ事業

23 セントビンセント及びグレナディーン諸島より
ゴンザルベス首相が来日

24 カリブ環境セミナー 2018

インタビュー

25 西インド諸島大学卒業生
ディーン・ミラー さん

27 第2回「ハイチ便り」～ハイチ共和国とは～
在ハイチ日本国大使（当時） 八田 善明 氏

太平洋・カリブ事業

29 太平洋・カリブ記者招待計画 2018

ザビエル留学生奨学金

33 第5期ザビエル留学生＆ APIC-MCT 留学生
上智大学及び大学院入学

34 第1期ザビエル留学生メアリー・ヘレン・モリさん
卒業祝いの夕食会

若い世代の育成

35 APIC-MCT 上智大学大学院地球環境学研究科留学制度
留学生へのインタビュー

37 津田塾大学＆上智大学
短期インターンシップの受け入れ

39 APIC インターン OG の声

40 駐ミクロネシア日本国大使の声

ナンマトル遺跡保存計画

シリーズ第4回

41 ミクロネシアの巨石文化
—世界文化遺産ナンマトル遺跡を中心に—
上智大学客員教授 片岡 修 氏

46 APIC 早朝国際情勢講演会／ APIC 役員名簿／
ご寄附のお願い

今号の表紙写真



パラオのダンサーたち

撮影者：フロイド・K・タケウチ

Photo Courtesy Floyd K. Takeuchi / Waka Photos

APICにとって2018年は節目の年でありました。「ザビエル高校留学生奨学金制度」による第一期生メアリー・ヘレン・モリが上智大学での四年間の留学生生活を終え、好成績で卒業しました。ザビエル高校にとっては日本への留学の道が開けたことは画期的なことであり、ミクロネシア連邦の親日的な国柄を一層発展させる上で特記されて良いと思っています。9月20日の卒業祝いの席では、メアリーは支援者に対する謝意を述べつつ、自信に満ちた口調で将来を語っていました。在席の一同は感慨深く受け止めました。2019年の事業計画が着々と進められています。数年前から取り組んでまいりました世界遺産「ナンマトル遺跡保護事業」に対し日本政府の無償資金協力を得ることが出来ました。また、ミクロネシア連邦との「観光事業」推進のためのミッションを派遣する準備も進められています。太平洋・カリブ島嶼国のジャーナリスト招聘事業の一層の充実を計り、これらの地域に於ける日本理解を高めてまいります。

国際情勢が流動化するなか、私共は地道な国際協力を一層進めてまいります。引き続きのご支援をお願いしつつ、2019年が皆様にとり発展の年となりますよう祈念致します。



一般財団法人 国際協力推進協会

理事長

佐藤 嘉恭

ごあいさつ

2018年6月～2019年1月のAPICの主な動き

6月23日	第3回日本体験プロジェクト「Sawara Experience」
7月 3日	津田塾大学より夏期インターン生の受け入れ（第1クール）（～7月27日）
7月19日	第349回早朝国際情勢講演会（外務省アジア大洋州局長 金杉 憲治 氏）
7月22日	ミクロネシア・チューク州若手リーダー招待計画（グループ①）（～7月29日）
7月26日	津田塾大学及び上智大学より夏期インターン生の受け入れ（第2クール）（～8月24日）
8月 6日	ゴンザルベス・セントビンセント及びグレナディーン諸島首相歓迎夕食会
8月25日	上智大学 ミクロネシア・エキスポージャーツアー（～9月5日）
9月20日	第1期ザビエル留学生メアリー・ヘレン・モリさん 卒業祝いの夕食会
9月21日	第350回早朝国際情勢講演会（前駐米特命全権大使 佐々江 賢一郎 氏）
同日	第5期ザビエル留学生のクロエさんとポールさんが上智大学に入学
同日	APIC-MCT 上智大学大学院地球環境学研究科留学生としてタマエさんとラジキットさんが入学
9月22日	ミクロネシア・チューク州若手リーダー招待計画（グループ②）（～9月29日）
9月26日	トリニダード・トバゴにてカリブ環境セミナー（～9月27日）
10月13日	第4回日本体験プロジェクト「Sawara Experience」
10月18日	第351回早朝国際情勢講演会（外務省中東アフリカ局長 岡 浩 氏）
10月20日	太平洋・カリブ記者招待計画 2018（～10月31日）
11月 2日	日本・ミクロネシア連邦外交関係樹立 30 周年記念式典での写真展
11月 4日	COM-FSM 学生招待計画 上智大学及び麗澤大学にて短期留学の受け入れ（～11月18日）
11月 6日	東洋大学ミクロネシア写真展「南洋の光」（～12月6日）
11月15日	第352回早朝国際情勢講演会（内閣官房 TPP 等政府対策本部首席交渉官 梅本 和義 氏）
12月20日	第353回早朝国際情勢講演会（外務省北米局長 鈴木 量博 氏）



Interview

株式会社エヌアイデー 取締役最高顧問
小森 孝一氏



略歴

佐原商工会議所顧問
株式会社エヌアイデー取締役最高顧問
佐原の大祭を始めとする佐原のまちづくりの牽引役として尽力されている。また、初代佐原の大祭実行委員会会長であり、NPO 法人まちおこし佐原の大祭振興協会の理事もされている。

情報通信技術（ICT）分野で有力企業である株式会社エヌアイデー（NID）は、企業の社会的責任（CSR）活動の一環として、過去一年、四回にわたって、同社の創業の地千葉県香取市佐原に海外留学生を多数招いて国際交流イベントを実施しています。同イベントはAPIC及び上智大学が共催しています。今回は、同社の創業者小森最高顧問にインタビューを行いました。【聞き手：APICインターン生 中村、藤崎、森内、平澤】

江戸の風情が残る佐原

問・小森最高顧問は佐原ご出身ですが、昔の佐原の町並みや様子、佐原での思い出で何か印象に残っているものはありますか。

私は昭和九年に佐原に生まれたので、昭和十六年私が小学生だった頃に太平洋戦争が始まり、昭和二十年小学校六年生の時に終戦を迎えました。実際に佐原の隆盛期を見た訳ではないのですが、昔はとても裕福な町でしたよ。明治四十五年に発行された「千葉県金満家一覽鑑」、いわゆる当時の

——エヌアイデーの創業

問・昭和四十二年に佐原で「京葉計算センター」を設立されてから現在に至るまでさまざまなドラマがあったとお聞きしました。経営者として会社を運営されてきた中で苦労されたこと、印象に残っているエピソードを教えてください。

終戦からしばらくすると私の佐原の家に突然アメリカの軍人がやってきて、英語ができなかったもので何を言っているかさっぱりだったんですが、かるうじて「北川宗助」という私の叔父の名は聞き取れたんです。私の叔父はIBM（コンピューター関連の事業をしているアメリカの会社）で働いていたことがあり、IBMの七人の侍と言われるような人だったんですよ。戦後叔父が佐原にいるのを知り、横田基地から連れに来たんです。それだけ当時コンピューター関係の仕事ができる人は貴重でした。

その後、その叔父がやっていた会社で私の従兄弟や親類は皆働いたのですが、私は嫌だったので、働いていなかったんです。私だけ仕事をしていなかったの、「みんなで力を合わせて何かを作り上げる経験をするために、会社を作って仕事をしてはどうか」と言われました。ちょうど、叔父の会社で働いていた従兄弟が、叔父の会社を辞めて佐原に戻ってきたので、手伝ってもらって、キーパ

ンチでデータ入力をする会社を作りIT関係の仕事に入っていました。それが後にNID（Nippon Information Development Co., Ltd.）となる「京葉計算センター」です。当時としては最先端の仕事で、佐原には雇用の場がなかったの、佐原の産業振興のために従兄弟とがんばりました。失敗をカバーしながら片腕としてやってくれる人がいないとできないことに気づきました。

昭和四十二年に会社を作ってから徐々に軌道に乗り始めた頃に、日本は円高になってアメリカへの輸出が減ったので不況になったんですよ。この時は東京へ行ってもどこへ行っても仕事が無いような状態でした。でも経営者の責任として仕事が無くて従業員に給料は渡さなければいけなかったの、この時は大変でした。本当に仕事が無かったの、東京からの仕事の電話を待つて釣りをしていた時期もありました。すると、東京から電話があつてA3サイズのアンケートのデータを入力する仕事の依頼があつたもので、そのデータを全部持ち帰ることにしたんです。それまで半年近く仕事が無かつた従業員は、（十九歳〜二十歳の女性だったのだけれど）土日祝日も休まずよく働いてくれて、その年はその仕事で大儲けしました。そこで、十分大儲けしたからこの仕事は辞めようかということになっていたんですが、東京の叔父の方の会社が仕事が無くて大変なので合併しようということになった。それで合併してできたのがNIDなんです。こちらは東京の市場に進出できたし、叔父の方は仕事が続けられたので良かった。

千葉県における富豪の一覧が載った記事があるのですが、それを見ると、上位である大関や前頭に佐原の富豪の名があります。今ではあまり想像が付きにくいかもしれませんが、佐原はそれだけ裕福な町でした。これだけ佐原が栄えたのは、舟運によって米を始めとする様々な物資を江戸に運んでいたからです。米を使った酒や醤油の商売も盛んでした。

しかし、私が育った時代の戦時中は配給制度が佐原でも適用されたので、佐原の中心的な商業であった米・酒・醤油の商売をしていた多くの人は廃業せざるを得なくなり、佐原の中心産業は衰退していききました。ここで、佐原の隆盛は途絶えてしまったとも言えるでしょう。

私がちょうど中学一年生だった頃だと思います。当時から私は佐原のお祭りが大好きだったので、戦後お祭りに参加する若い人たちは戦争から生き残って帰ってきた人が多かったの、荒っぽいい人が多くなっていました。そこから徐々に佐原の大祭は、派手で金食い虫の荒れる山車祭りと言われるようになり、「佐原三悪」の一つになってしまったのです。佐原の人たちもお祭りの意味を忘れてしまつて、いつしかお祭りは佐原の人たちからも疎まれるようになっていました。お祭りが大好きだった私としては、このままでは佐原のお祭りが無くなってしまうのではないかと強い危機感を抱いていましたね。



第4回「Sawara Experience」にて

たですね。その頃は、ソフトウェアの時代になりつつあった時でしたが、理工系の人たちは少なかつたから私の会社にとっては有利だったんです。当時はコンピュータの性能が悪かったものだから、そういう人たちが頭を使って仕事をしないといけないという点では苦しい時代でしたが。それが今ではIoTと言われるようになって、そういった人材は私の会社の財産になっていますね。

佐原の町と佐原の大祭の復興

問・小森最高顧問が佐原の町や大祭の復興に対してどのように着手していききましたか？

私はお祭りというものが小さいころから大好きでしたし、何より佐原が大好きだったので、どうにか佐原の町を住みやすい「よい町」に変えていきたいと考えました。そこで手始めに私と友達の三人で佐原のお祭りの歴史を勉強し始めたわけです。資料を探しているうちに私たちは、諏訪神社の奥底からお祭りの引き継ぎ書を見つけ出しました。諏訪神社は、かの有名な長野県にある諏訪大社から勧請された平安時代の創建と伝わる歴史のある神社です。その古文書は中身だけでなく文字も古いですが、全部繋げ字なわけです。そのため、解読するのに素人では日が暮れるところの話ではないんですよ。そこで、神主さんになんとか頼み

込んで古文書のコピーを取りました。それを古文書の専門家やお祭りの歴史を知っている人などに託して翻訳してもらったのです。ですが最低でも二年かかると言われてしまいました。そこでは忍耐強さが身に付きましたね。

引き継ぎ書を解読後、佐原の祭りはまちづくりの出発点であったことがわかったのです。というのも、お祭りを開催することが自然とコミュニティ作りにより寄与しているからです。佐原の大祭では、佐原を地域ごとに区分し、お祭り開催までの約一か月の過程で、山車に乗せる飾り物（大形）を地域対抗で作ります。そうすると地域間の競争意識が芽生え、飾り物をより良くしようと地域内でコミュニケーションを活発に行うようになるんです。こうして周囲との仲間意識が出来上がっていくことで、地域で団結して助け合うコミュニティが成り立っていききました。それは部外者による空き巣犯罪者を摘発する防犯機能や、小野川氾濫といった災害があった時の防災機能を生み出した。

しかし戦後の佐原の衰退とともに、佐原の大祭は、本来伊能家が意図していた「コミュニティ作り」という目的から離れてしまっているのではないかと、という考えに行き着きました。防犯防災につながるなんて誰もわかっていないんです。だから私は佐原の大祭の本来の目的を人々に思い出しもらうために祭りの復興に着手しました。

なんと神までも私に味方してくれて、復興着手後の佐原の祭りは大成功に終わったんですよ。お金を払ってまでも見る価値のあるお祭りだとみんなが認識してくれました。

この成功の裏には、祭りの復興に携わってくれた佐原の市民や、お祭り終了後に清掃の手伝いをしてくれた自社の社員など、多くの人の支えがありました。翌年は三時間でチケットが完売し、佐原の地元民が買えなくなるほどになったんです。それだけお祭りの価値を理解してくれる人が増えたんだと思います。その意識の変化が目に見える結果として、平成十六年には佐原の大祭が、国の重要無形民俗文化財に指定され、平成二十八年にはユネスコ無形文化遺産に登録されました。

伊能忠敬の教え

問・佐原の大祭を復興される際に、伊能家の考え方を参考にされたのですね。伊能忠敬さんは佐原の町の自治にも携わったそうですが、まちづくりにおいても彼の考え方に影響を受けたのでしょうか？

はい。忠敬先生の考え方はまちづくりを行う上で大変参考になっています。先生が若い頃佐原には役人がいなかったそうで、「役人がいないなら自分たちで自治を行おう」と言って町人自ら自治の



問・佐原の大祭を復興させていくにあたって、どのようなことに取り組まれましたか？

先ほども申し上げたように、戦後十五〜二十年頃における佐原の祭りはただ酒を飲んだくれて、喧嘩が絶えない場と化していました。だから次第に市民たちは佐原の祭りを疎むようになり、祭りの価値を見失っていききました。そのような人たちをいかにお祭りの復興に巻き込んでいくかが知恵の使いどころでしたね。彼らに協力してもらうためには、戦後から今まで行われていたお祭りは、本来のお祭りの目的とはかけ離れていたということをしつかり「伝える」という作業から取り掛かりました。

また、いかに佐原の大祭の価値を理解してもらうかと三人で話し合った結果、「無料で見せるから価値がわからないのだ。ではお金を払わせよう」

先頭に立たれたそうです。その精神は今なお佐原に受け継がれており、まちおこしが市民主導で行われているのもそれ故でしょう。

また自分自身、忠敬先生について調べれば調べるほど、忠敬先生は心が豊かで、人に対する優しさを十分に備えている人だった。そのことがよくわかる先生の言葉があります。「地域が良くなければ、自分も良くならない」というものです。先生は常に豊かな心を持つことを大切にされていきました。そのためには自分が生活する地域が豊かで住みよい場所であるべきだと考えられたのでしよう。先生は佐原の自治に尽力されましたが、それは自分や、佐原の人々の心を豊かにするためでもあったのです。町の豊かさは、そこに住む人々の心の豊かさにつながり、逆に先生のように豊かな心を持つていなければ豊かな町を作ることはいけません。この考え方はまちづくりにおいてとても大切なことですね。

小森最高顧問の理想

問・会社の経営や町おこしを行うにあたって、小森さんが大切にされていることをお聞かせください。

やっぱり「人」ですね。人を大切にし、人を信頼することが何よりも大切です。自分がN I Dの

今回のインタビューに参加した
— インターン生 たちの 声 —

小森最高顧問は、たとえ周りから非難されても自分がやるべきことを見失わずに、軸を持って復興事業に取り組んでおられたそうで、その姿に大変感銘を受けました。また、市民を復興事業に巻き込むために、自分の思いを行動で示すことを心がけておられたそうで、私もその姿勢を自らに取り入れていきたいと思いました。

私は今まで海外にばかり意識が向いていましたが、このインタビューを通して日本の一地方でその地域を愛し、その地域をより良くするために一生懸命な方の存在に触れ、もっと国内の地方にも目を向けていこうと思うようになりました。貴重なお話をして下さった小森最高顧問、本当にありがとうございました。



津田塾大学
学芸学部 1 年
中村 彩乃 さん

香取市の佐原は、川を中心に稲作が栄え、とても豊かな土地であったという点において、わたしの故郷熊本に相通ずるものがあり、とても親しみを覚えました。そういった点で、佐原を盛り上げることに尽力した小森最高顧問に話を伺うのはとても楽しみでした。話をお聞きし印象的だったのは、故郷の土地と文化を愛する心が小森最高顧問を突き動かしていたということです。祭りが大好きであった小森最高顧問が、熱心に祭りのことを調べ、住民を巻き込んでいったストーリーには、大変感動しました。住民自身がまちやその土地の文化を残していきたいとイニシアティブをとっていかない限りは、まちを盛り上げ、文化を継承していくことは難しいのだと実感しました。地域活性という点においても、学びとなるインタビューでした。



津田塾大学
学芸学部 4 年
平澤 碧惟 さん

今回は千葉県香取市佐原の町おこしを試みた小森最高顧問からお話を伺いました。常に上を目指し、自らの気持ちを行動へ移す方へ直に質問を投げかけることで、自分の中に新しい価値観が生まれていくのがわかりました。相手のことを入念に調べて理解を深める事前準備の大切さはもちろん、インタビューの本質を探究する内容の濃い時間になりました。「なぜその質問をどんな目的で、どうしてこのタイミングで聞くのか」と常に自分自身に問いかけながら準備を進めていくことで、自分たちの活動の目標と目的を意識しながら活動できる有意義な時間でした。ここで得た言葉を伝えることの大切さを今後の人生にも活かしていきます。



津田塾大学
学芸学部 1 年
藤崎 優香 さん

今回、小森最高顧問へのインタビューを通して、佐原の町並みがここまで復興してきた背景には、伊能忠敬の時代から受け継がれてきた「自治」の精神があることを知り驚きました。また、小森最高顧問の「人を大切にする」という思いが、地元の人々を巻き込んでの復興や地域のつながりの再認識に繋がり、今では訪日観光客や APIC の留学生のように国外へも「人」の繋がりが広まっているのだという印象を受けました。国際協力事業と聞くと他国との関係に着目しがちですが、佐原のように地域に眠っている日本の魅力を見直し発信していくことも、他国への日本の印象を左右するという点で重要であることを再認識する貴重な機会となりました。



上智大学
総合グローバル学部 3 年
森内 みのり さん

社長をしていた時、私は社員を信頼して仕事を任せていたんです。何か頼まれたり聞かれたりするまではこちらから何も言いませんでした。社員には自分で考えて行動してもらいたかったからです。そして社員のことを信頼していたからです。その結果、社員が成長し、良い人材が会社には揃いました。そのおかげで会社が手掛ける事業の幅も広がったんです。

また先ほども述べましたが、京葉計算センターの社長として勤めていた時、仕事が全く無かった時がありました。その後幸い仕事が舞い込んできたんですけど、そうしたら社員が今までの分を取り返すと言って、休日も全員出勤して一生懸命働いてくれたんですよ。そのおかげで会社は大儲けしました。会社は「人」です。人なくしては成り立たないし、良い仕事ができません。大変な時期を乗り越えることもできません。まちおこしも同じです。私は自分が大変だった時、いつも人に助けられてきました。だから自分も、どんな時でも人を大切にしようと思うんです。

また、「忍耐」と「パフォーマンズ」も大事です。「忍耐」について話すと、私は会社をいくつか作りましたが、どれも六年くらいはずっと赤字が続きました。でも、いつかきつと良くなると信じて辛抱強くコツコツ頑張るんです。そうすると、七年後くらいから黒字に変わるんです。大変な時も我慢してあきらめないこと。努力し続けることが大切ですね。「パフォーマンズ」については小野川の

例があります。今でこそ佐原の観光資源となっている小野川ですが、昔はゴミだらけでした。自転車なんかがたくさん沈んでいたんですよ。そこで、きれいな小野川を取り戻そうということで私と十数人のボランティアで川の清掃を行いました。最初、町の人たちは「またあの人たち変なことをやるよ」と冷めた目で見ていましたが、川が日に日にきれいになり、四十年ぶりに舟運が再開されました。川沿いには柳の木も植えられ、風情が良くなりました。すると、市民の人々の姿勢も変わったんです。今までは多くの人が川にゴミを捨てていた状態でしたが、捨てる人がほとんどいなくなりました。ゴミを捨てないように意識するようになり、捨てている人を見かけると互いに注意するようになりました。なぜなら、私たちが一生懸命川の清掃をしていたことを見て、自分たちが川を汚すことに抵抗感を覚えたからです。自分たちの頑張りを人は必ず見ています。そしていつしか協力してくれるようになります。だからこそ、人に自分たちの頑張っている姿を見せることは会社経営やまちおこしなど、人を動かす場面においてとても大切なことだと思います。

理想は、より質の高い歩行空間を作ることです。佐原から近隣に出て行った若者たちが、自分の子

問・小森さんは「佐原のまち」に対してどのような理想像を持っていらっしゃいますか？



小森最高顧問（中央）とインタビューの APIC インターン生たち

ども達を連れて佐原のまちなかに安心して遊びにくるような上質な歩行空間です。先ほども紹介した伊能忠敬先生の「地域が良くなければ、自分も良くなれない」という言葉。これは、佐原のまちをより良くすることは、市民をより豊かにすることにつながることを示唆しています。私はこの町が大好きです。だからこそ、この町の質を向上させ、より多くの人の心を豊かにしたい。そしてより多くの人が自分が愛する町を好きになってもらいたいですね。



弓道に挑戦する留学生たち

当日のスケジュール

- 07:45 祖師谷国際交流会館 出発
- 10:45 (株) NIPPONIA SAWARA
古民家改修現場の見学
- 昼 甘味処いなえにて昼食
- 12:30 水郷佐原山車会館 見学
- 13:30 佐原高校にて弓道体験
- 14:00 佐原高校の生徒との交流会
- 15:30 香取神宮参拝
- 19:30 祖師谷国際交流会館 到着



2018年6月23日に第三回目となる日本体験プロジェクト「Sawara Experience」を実施しました。本プロジェクトは株式会社エヌアイディ(以下「NID」)、上智大学、そしてAPICの三者による共催の形で千葉県の佐原にて実施されました。今回は上智大学祖師谷国際交流会館に滞在中の留学生が参加し、9カ国から14名の学生が集まり国際色豊かなイベントとなりました。

今回は、これまでの第一回、第二回の Sawara Experience で訪問した場所や体験に加え、佐原の古民家を改修し宿泊施設として利用する事業を行っている株式会社NIPPONIA SAWARAの建設現場の見学や、地元の千葉県立佐原高等学校の協力のもと、弓道体験に挑戦しました。

古民家の改修工事をしている現場では、大工さん自らが伝統的な建築様式や手法について解説してくださいました。この古民家改修の事業は、佐原の空き家対策としてだけでなく、町おこしの一環としても行われています。留学生たちは普段見ることのできない古民家改修の裏側を見学すると同時に、大工さんの古民家改修を通しての佐原の町おこしにかかる思いを聞くことができました。

また、本体験プロジェクトの中でも初めての試みとなった佐原高校弓道部との交流会においては、留学生たちは弓道部の生徒による指導のもと、弓

道体験に挑戦しました。初めて握る弓に悪戦苦闘しながらも、高校生たちの丁寧な指導により、留学生が放つ矢は次第的にへと近づいていきました。同時に、弓道部の生徒たちは技術面だけでなく、矢を射る際の作法まで指導してくれ、留学生たちも理解を深めていきました。

弓道の稽古後に行った交流会「SAWARA Tea Time」では、年齢や国籍に関係なく、高校生・留学生全員が積極的に参加し、有意義な時間となりました。将来の夢について話す高校生や、日本特有の文化について聞く留学生など、質問や興味は様々で非常に活発な交流が行われました。また、NID小森俊太郎代表取締役社長及び、佐原高校校長先生が「Sawara Experience」が実施されるようになった経緯やその目的について留学生・高校生にお話し下さり、このイベントが持つ可能性を参加者全員で共有することができました。

一日を通して天候には恵まれませんでした、佐原の町並み散策や、ユネスコ無形文化遺産にも登録された「佐原の大祭」の山車がおさめられている水郷佐原山車会館の見学、そして香取神宮境内での祈禱など、予定していたイベントはすべて実施することができ、留学生だけでなく運営スタッフも含め参加者全員が佐原の魅力をあますことなく堪能することができました。

(文責：金原)

これまでの「Sawara Experience」

実施	時期	メインイベント
第1回	2017年10月	佐原の大祭 秋祭り
第2回	2018年1月	佐原の町散策・餅つき体験
第3回	2018年6月	弓道体験・佐原高校生徒との交流
第4回	2018年10月	佐原の大祭 秋祭り
第5回	2019年7月(予定)	佐原の大祭 夏祭り

◆ 佐原の概要 (歴史・大祭)

【香取市佐原地区】

千葉県北東部に位置する人口約5万人の町。古くから水郷の町として栄え、江戸時代には「お江戸みたけりや佐原へござれ、佐原本町江戸優り」と謳われるほどであった。また、日本地図を作った測量家である伊能忠敬を輩出した町としても知られる。

【佐原の大祭】

約300年の歴史を持つ佐原の一大行事。7月に行われる八坂神社祇園祭と、10月に行われる諏訪神社秋祭りの総称で、関東三大山車祭りの一つとして称される。佐原の大祭は、地域ごとに神話や歴史上の人物の大人形、大きな飾り物を付けた山車を作り、「佐原囃子」を演奏しながら曳き廻される地域対抗型のお祭りである。小森最高顧問をはじめとする地元の方たちの取り組みにより、2016年にはユネスコ無形文化遺産に登録された。



参加した留学生の声

プログラムに参加した17名の留学生のうち、2名の感想文を掲載しています。(APIC 和訳)

上智大学 国際教養学部 3年 Vivian さん

「Sawara Experience」は日本での生活の中で最も素敵なイベントとなりました。当日のスケジュールは綿密に練られ、美味しい食事や山車曳きの貴重な体験など佐原でしかできないことを満喫することができました。特に地元の方々と一緒に山車を曳いたことは忘れられない思い出です。日本で勉強する一留学生として、当日英語のパンフレットを配布してくれたことや、スタッフの方が終始英語で丁寧に各所を説明してくれたことは本当にありがたいことでした。また、一緒に参加していた日本人学生も積極的に話しかけてくれ、充実した時間を過ごすことができました。一日お祭りに参加して言えることは、佐原のまちを、そして日本の文化・伝統

を楽しむためには一日では到底足りないということです。それほど学びがたくさんあるイベントでした。次回もまた参加してみたいです。



Vivian さん (右)

テンブル大学ジャパンキャンパス 国際関係学科 2年 Yoriko Nampei さん

今回私が参加した「Sawara Experience」で経験したことは、参加する前に私が想像していた以上のことの連続でした。佐原のまちの雰囲気には、地元コミュニティの絆の強さがあふれ出ていました。当日の運営スタッフの方々は、地

元の方々と一緒に山車を曳く機会や踊り手の方達と伝統的な踊りを楽しむ体験、そしてお弁当の時間や屋台をめぐる時間など、細部に至るまで綿密にスケジュールを組んでくださり、佐原の魅力を余すことなく楽しむことができました。日本で学ぶ留学生として、この素晴らしいイベントに参加することで日本の伝統を目で見て肌で感じる事ができたと同時に、尊敬の念を抱くようになりました。「Sawara Experience」という特別なイベントの運営に尽力して下さったスタッフの方々に感謝申し上げます。そして、これからより多くの留学生がこのイベントに参加し日本の新たな側面を発見し、学んでいくことを一留学生としてとても楽しみにしています。



Yoriko さん (手前右)



2018年10月13日にAPICは、株式会社エヌアイデー(以下「NID」)及び上智大学との共催で、千葉県香取市の佐原を舞台とした国際交流プロジェクト「Sawara Experience」を実施しました。第四回目の開催となった今回は、上智大学を中心に14カ国から17名の留学生と9名の日本人学生が参加しました。

今回のツアーは、約300年の伝統を有し、ユネスコ無形文化遺産にも登録されている「佐原の大祭」の秋祭りに参加することを通して、各国からの留学生に日本の伝統文化への理解と、現地の市民との交流の場を提供することを目的として実施されました。山車整列の見学や千葉県立佐原高等学校の生徒との交流、歴史的建築物が集まる地域を流れる小野川の舟巡り、山車曳きや串焼き体験等々、多くの日本文化に触れる機会があり、充実した一日となりました。

当日は祭りの開催日とあって町は多くの人で賑わいを見せるなか、壮観な山車整列の景色や祭りのために半被を着込んだ地域の方々を見て、留学生たちは大変驚いているようでした。また山車に施された伝統的な彫刻や、山車の上に飾られている歴史上の人物を模した巨大な人形を前にし、留学生たちが日本人学生に積極的に日本文化について聞いてまわるような場面も見られました。

午後には実際に山車を曳かせていただける機会もありました。留学生たちは、はじめこそやり方が分からず戸惑っていましたが、半被を着用し、地元の方々の掛け声に合わせて「ワッショイ、ワッショイ！」と大きな声を出して山車を曳いており、とても楽しんでいるようでした。夕食後には、山車を回転させる佐原の大祭名物の「のの字廻し」や「手踊り」も見学する機会があり、独特な祭りの雰囲気に歓声が上がっていました。

実施後に留学生からは、「とても充実した一日となった」「出来ることならもう一日滞在したい。」「日本のローカルな伝統文化に触れる大変良い機会となった。」など、非常に一日が充実していたことを伺わせる声が多くありました。日本人学生と留学生との間で自国の文化等に関する会話をする機会が多かったこと、そして佐原地区の方々も私たちに温かく接してくださったこともあり、今回のツアーは運営スタッフを含めた参加者全員にとって大変印象的なものとなりました。(文責 塚本)



2018年7月22日～7月29日の間、ミクロネシア連邦チューク州から、ウィスニー・ナカヤマ議員とジェイソン・ロバート州最高裁判所判事の2名の若手リーダーを招待しました。



神津島郷土資料館にて。左から：ナカヤマ議員、ロバート判事、APIC 佐藤常務理事、駐日ミクロネシア連邦大使館モリ公使

◆ブリーフィング（APIC／エーオンジャパン株式会社／JICA）

訪日の翌日、7月23日にはAPICの佐藤嘉恭理事長から、今回の招聘計画の日程及びAPICの活動についての説明を行い、その後、エーオンジャパン株式会社にて日本の経済・ビジネスについてブリーフを受けました。

また、JICA江島理事への表敬訪問では、ゴミ処理問題に対する取り組み等を含めた多様な活動について説明を受け、なかでも太平洋島嶼国リーダー教育支援プログラム（Pacific LEADS）に強い関心を示していました。

◆APIC主催夕食会

7月23日の夜に、APIC佐藤嘉恭理事長主催の歓迎夕食会を東京倶楽部にて開催しました。夕食会には、フリッツ駐日ミクロネシア連邦大使、マツタロウ駐日パラオ共和国大使をはじめ、訪問先企業や教育機関の方々が出席しました。夕食会の中で、2名の若手リーダーからは今回の招待への謝辞が述べられました。

◆神津島視察

7月24日～25日の日程で、神津島の視察を行いました。同島は伊豆諸島を構成する一つで、チューク

◆荒川／最高裁判所／ミクロネシア大使館

7月26日は、特定非営利活動法人荒川クリーンエイドフォーラムを訪問し、ボランティアの取り組みや荒川の現状などについて説明を受けました。ゴミに対する意識の啓蒙などについて質疑応答があり、特に、ミクロネシアチューク州で問題となっているプラスチックごみ対策について理解を深めました。その後、最高裁判所において、林景一判事（元駐英大使）を表敬訪問し、担当課からのブリーフを受けました。担当課からは「日本の司法制度・裁判官の任用・最高裁のしくみ」について説明があり、大法



紙漕ぎ体験中のリーダーたち

州のウエノ島とほぼ同規模のサイズということもあって、今回の視察地として選ばれました。視察にはAPIC佐藤昭治常務理事と駐日ミクロネシア大使館のロジャー・モリ公使も同行しました。両名は各インフラ施設や公共施設などを精力的に視察し、各所で多くの質問をして、理解を深めました。

視察一日目に訪れた東京電力の発電所では、チューク州よりも発電量の大きい発電所が、半分以下の人数で運営されていること、また施設が清潔であることに若手リーダーたちは驚き、具体的な稼働状況、発電費用や利用料金についても多々質問を行いました。次に、漁協施設では金目鯛の自動選別機に目が釘付けになりました。キハダ・カツオ・メバチ等を輸出するチュークにとって商品に付加価値をつけることが課題で、選別機による作業の効率化や水の効果的な使用による品質管理が大変参考になったとのことでした。

診療所では透析器を導入したものの、必要とされる大量の水が確保できず使用されないままになっているチュークにとって、水道水から純水を精製する逆浸透装置は「目からウロコの解決方法」と驚嘆し、使用する水の量等、熱心に質問していました。この日の終わりに開催された浜川村長主催歓迎夕食会では、地元の食材を使った料理と焼酎を堪能しながら率直な意見交換が行われました。

延と小法廷を見学しました。その後、フリッツ駐日ミクロネシア大使へ表敬訪問しました。

◆都内観光

7月27日は、都内を観光し、今回の訪日を締めくくりました。リーダーたちは地下鉄にも乗車し、その機能性と清潔さに感動したということでした。

翌日28日に帰国の途につき、両名から、「今回の訪日において、すべての面会先、訪問先で良い話し合いができた。また、日本の伝統文化や歴史等々について知見を広げることができ、高度に洗練された都心の趣も印象的であった。神津島への視察で乗船した高速船もとても快適であった」との感想がもたらされました。

（文責：斉藤）

視察二日目に訪れた神津島郷土資料館では、昔の生活の様子や漁具等を見学しながら、「シャシンキ」「カツオブシ」などの日本語がそのままチュークに残って使われているという話がありました。下水道施設では、チュークでは汚水処理せずに海へ流しているところもあり、浄化槽について熱心に質問、戸別式より共同式が良いとのアドバイスを受けました。

神津島の空港視察では、東京都職員から概要説明を受けた後、気象モニターの画面や滑走路を見学しました。年間乗降客数や滑走路延伸計画の有無等質問が出ました。三浦漁港視察では、一島二港方式による岸壁の整備や運営、避難港としての役割について説明を受け、近くにある船揚場と、津波避難階段の建設予定地も視察しました。

また、地元で歓迎されない桑の木と、豊富な湧き水を利用して地元で貢献したいという株式会社興栄社菅野社長の説明に続いて、リーダーたちは紙漕ぎを体験し、ハガキを制作しました。

最後に、浜川村長、松本議長出席のもと、村役場にて意見交換会が開かれました。ナカヤマ議員からは「チュークとの類似点も多いが、神津のほうが遥かに発展している」、「チュークに戻ったらすべての施設を訪れ、現状と改善余地について自分の目で確認する」との発言があり、ロバート判事からは「この視察で目にしたもの、出会った方々すべてが素晴らしいかった」、「帰国後は司法の立場からナカヤマ議員をサポートし、チュークの発展に尽くしたい」との言葉がありました。

滞在中のスケジュール

7/22 (日)	来日
7/23 (月)	APICによるブリーフィング エーオンジャパン（株）にて日本経済・ビジネスブリーフィング、JICA訪問 APIC主催歓迎夕食会
7/24 (火)	神津島へ移動 村役場訪問、島内視察 浜川村長主催夕食会
7/25 (水)	島内視察後、東京へ移動
7/26 (木)	荒川クリーンエイド・フォーラム訪問 上智大学大学院まくだとなど教授によるブリーフィング 最高裁判所視察、ミクロネシア連邦大使館訪問
7/27 (金)	都内視察
7/28 (土)	離日

2018年9月22日～9月29日の間、ミクロネシア連邦チューク州から、カーティス・グラハム州海洋資源局長代理とマルセラス・アカピト州保全協会理事の2名の若手リーダーを招待しました。

◆都内観光

来日直後の9月24日は、都内を観光し、築地市場、江戸東京博物館、皇居、東京駅周辺、銀座、渋谷スクランブル交差点など各地を訪問し、東京を満喫しました。

◆多摩市立蓮光寺小学校視察

9月25日には多摩市立蓮光寺小学校を訪問しました。両氏は、チュークの教育現場、特に公立小学校の現状を危惧しており、教師の質保証やカリキュラムの組み方までも熱心に質問し、蓮光寺小学校の先進的かつ体験的な環境教育や、地域連携の促進を目指す「開かれた学校」という側面に関心を示していました。

蓮光寺小学校の校長先生はミクロネシア連邦の自然保護の取り組みに非常に関心を示しており、互いに学校の写真や生徒の様子をビデオで送り合うことを通して、日本の生徒達により新鮮でグローバルな教材を届けたいと今後も連携していくことを約束していました。



JICAにて。アカピト州保全協会理事（右から2番目）とグラハム州海洋資源局局長代理（右端）

◆八王子市研修・JICAによるブリーフィング

26日午前中には、八王子市の戸吹クリーンセンターを見学し、同市主催の研修プログラムに参加しました。八王子市はJICAの委託を受け、ミクロネシアチューク州の支援を行っています。今回はその取り組みと八王子市が市内で行っている取り組みを元に視察が行われました。早朝から参加し、朝礼、ラジオ体操なども経験し、ディスカッションにおいては、「法律、制度を整えても、なかなかうまくいかない、住民の意識をどう変えていくかが課題で、トップダウンではなくボトムアップの解決が求められている」と述べていました。住民の意識という点において、ゴミの分別表には特に関心を示しており、重要な資料である旨を述べていました。施設見学においては、収集されたゴミがどのように処理されてい

るのか、各行程ごとに施設を巡回しました。

プログラム内容

1. 朝礼・収集車見送りの見学
2. 講義（八王子市の取り組み紹介）
3. 施設見学
4. ディスカッション（進行：創価大学 経済学部 准教授 碓井健寛氏）

八王子市の研修終了後、JICA本部においては、日本のミクロネシアに対する支援についてのブリーフィングを受けました。主に、JICAの支援プロジェクトの進捗状況やこれまでの日本のミクロネシアに対する支援について説明を受け、熱心に聞き入っていました。



八王子市での研修プログラムの様子

◆APIC主催夕食会

9月25日の夜に、APIC佐藤嘉恭理事長主催の歓迎夕食会を東京倶楽部にて開催しました。夕食会には、フリッツ駐日ミクロネシア大使をはじめ、訪問先の八王子市、関係企業の方々が出席しました。2名の若手リーダーからは今回の招待への謝辞が述べられました。



APIC 主催夕食会で挨拶するアカピト州保全協会理事

◆虹の下水道館 本所防災館 視察

27日には、東京都水道局が管理しており、社会科見学向け広報施設の役割を果たしている「虹の下水道館」を訪問しました。東京の下水処理システムに対して理解を深めると同時に、同館が中学生・小学生向けに行っている環境教育の取り組みについて学びました。

「私たちがチュークで、子供達に環境保全のためには一人一人の意識・行動の変革が重要であることを訴えても、なぜそれが大事なのか、どのような変化があるのか、を子供たちが自身が理解しないと何も変わらない」と述べ、施設のように、実験や模型をとおして視覚的・体験的な理解を促すことにより、子供達の行動の変化を生み出せるのではないかと話していました。

翌日28日には、消防庁が管理している本所防災館を視察し、暴風雨体験等を行い、日本の災害への対策などについて学びました。

（文責：斉藤）

滞在中のスケジュール

9/23 (日)	来日
9/24 (月)	都内視察
9/25 (火)	多摩市立蓮光寺小学校 視察 駐日ミクロネシア連邦大使館 訪問 APIC 主催歓迎夕食会
9/26 (水)	八王子市 戸吹清掃事業所 視察 JICA 訪問
9/27 (木)	虹の下水道館 訪問
9/28 (金)	本所防災館 訪問
9/29 (土)	離日

上智大学ミクロネシア・エクスポートジャーニーツアー

上智大学及び上智大学短期大学部は、8月25日から9月5日にかけて、実践型プログラム「ミクロネシア・エクスポートジャーニーツアー」を実施し、大学から12名、短期大学部から3名、合計15名の学生が参加しました。



上智大学及び上智短期大学部は、国立ミクロネシア短期大学（COM・FSM）との間で結ばれた協力協定に基づき、ポンペイ島にて、2015年より毎年9月頃にミクロネシア異文化体験ツアーを実施しており、今年度で4回目となりました。本ツアーは、昨年度より「ミクロネシア・エクスポートジャーニーツアー」として単位化されており、上智大学の学生は履修登録をして所定の成績を修めることで、全学共通科目として2単位が付与されます。APICの佐藤昭治常務理事（上智大学グローバル教育センター客員教授）及び、ナンマトル遺跡研究の第一人者である片岡修博士（上智大学客員教授）が担当教員として本ツアーを引率しました。

本年度は昨年度からプログラム日数を4日間伸ばすことで、講義・現地でのアクティビティを増やし、よりアカデミックなプログラムとして運営されました。学生はCOM・FSMの学生寮に滞在しながら、現地の有識者による特別講義を受けたほか、ミクロネシアのユネスコ世界文化遺産ナンマトル遺跡や自然豊かな離島を訪れるなど、ミクロネシアの歴史・文化・自然を肌

滞在中のスケジュール

8/26 (日)	ミクロネシア連邦ポンペイ州着
8/27 (月)	講義①(堀江 駐ミクロネシア大使) オーミネ小学校 訪問 JOCV 柴田様、小川様によるプレゼンテーション
8/28 (火)	講義②(ハグレリルガム元大統領) ソケース山登山
8/29 (水)	講義③(ミクロネシア連邦政府歴史保存局 コーラー氏) ナンマトル遺跡、ケプロイの滝 見学
8/30 (木)	講義④(モリ前大統領) 講義⑤(COM-FSM 社会科学部長エーメス教授)
8/31 (金)	MCT プロジェクト視察
9/1 (土)	ダウレイレイ島視察
9/2 (日)	ホームステイ体験
9/3 (月)	ホームステイ体験
9/4 (火)	フェアウェルパーティ ポンペイ州出発
9/5 (水)	日本着

ミクロネシア短期大学
College of Micronesia - FSM

1972年にミクロネシア連邦に設置された2年制の大学。教養学科のほか海洋学科、ミクロネシア研究学科などの学科がある。ミクロネシア連邦の各州から学生が集い、ミクロネシア連邦の発展を支える国内唯一の高等教育機関として存在感を示している。

で感じる体験学習をしました。現地講義では、エマニエル・モリ前ミクロネシア連邦大統領や堀江良一在ミクロネシア日本国大使らを講師に招き、ミクロネシアの歴史や文化、社会的課題について学びました。また、JICAミクロネシア事務所でのブリーフィングや、青年海外協力隊として現地の小学校にで教員をしている方の話を通して、現在の日本とミクロネシアの関わりについても理解を深めました。

現地での体験学習の最後に、学生たちは2泊のホームステイ体験をし

した。それぞれのステイ先にて、学生たちはダイビングや釣り、島内の親戚が集まった夕食会などを経験し、人々の温かさに触れることとなりました。

帰国後には、学生たちはレポート作成及び事後報告会を実施しました。現地での経験に大きく影響され、今後ミクロネシアのためにできることをしたい、と述べる学生が多くなりました。参加学生は、今度はミクロネシアについて自ら発信していく役割を担っていくことでしよう。

(文責：向井)

参加学生の声

上智大学 総合人間科学部2年

杉浦 正太郎 さん

私がこのツアーに参加したのは、大学の講義でミクロネシア連邦に関心を持ったためでした。このツアーでは、ミクロネシアについて大使や元大統領などといった方々から学び、ポンペイ島の豊かな自然の中で過ごしました。出発前には生活環境やコミュニケーションに不安はありましたが、現地ではCOM・FSMの学生やホストファミリーの温かい歓迎を受け、充実した日々を過ごすことができました。

その中で特に感じたのは人の温かさでした。私は滞在して数日は学生と会話することもあまりありませんでしたが、キャンパスですれ違ったり日本語で挨拶してくれたり積極的に話しかけてくれる現地の学生が多く驚きました。ホームステイではご先祖の命日の集まりにもお邪魔し、そこでも来客として歓迎していただき、島に伝わる民謡を聞かせていただきました。

ツアーの中で特に印象に残っているのは、COMの学長の勧めで見たドキュメンタリー映画です。「Island Soldier」という映画で、コスラ工島からアメリカ軍に入隊してアフガンスタンで亡くなった青年を中心にミ



杉浦さん（右端）

クロネシア連邦とアメリカ合衆国の関係性と現状を描いたものでした。高い収入と立身出世のために多くのミクロネシア連邦の若者がアメリカ軍に志願していることを知り、美しい海に囲まれた島の一つの側面についてとても考えさせられました。

私はこのツアーに参加して、観光旅行では味わえない学びや経験を経ることができ、温かい現地の学生やホストファミリーとの交流を通じて自分自身のコミュニケーションの姿勢も少し変わったように思います。帰国して普段の生活に戻った今、ツアーの内容を表すプログラム名の中の「エクスポートジャー」という言葉について、その意味がわかったような気がします。

参加学生の声

上智大学 総合人間科学部4年

渡邊 咲樹 さん

私は2年半前に1か月間APICのインターン生として活動した経験があるため、ぜひ自分の目でミクロネシアという国を見て感じインターンで学んだことを深めたいと思い、今回のツアーに参加しました。

日本とミクロネシアの協力関係について考える際、地理的状況や直面する課題に共通点があったとしても日本で行われていることが必ずしもミクロネシアの社会で受け入れられるとは限らないということを念頭に置かなければなりません。そのことをインターンの際は規模的な違いや技術的な違いに焦点を当てて考えていましたが、今回のツアーを通して実際に現地の人と触れ合い自分の目で見たことで、現地の人々が大切にする考え方も関係していると実感することができました。国はそれぞれ培ってきた考え方や置かれている状況が異なるという視点は、グローバルな課題に取り組むうえで重要だと改めて学びました。

また、ミクロネシアの人々の温かさに触れる中で、これから社会人として生きていく上で大切となる考え方を学ぶこともできました。ホームステイ先のホストブラザーが「今自分が大学に通えているのは様々な人からの支援を得ること



渡邊さん（中段左から2番目）

ができたからだ。次は僕が助ける番だから、早く大学を卒業して自分を支援してくれた人々に恩返ししたい。色んな人から助けてもらってそれをお返しする。これこそミクロネシアの人々のあり方だよ。」と話してくれたことが非常に印象に残っています。ミクロネシアの家族意識や、助け合う意識を実感した出来事でした。私は自分本位で生活してしまっていた自分に気づき、自分ではない誰かのために働くことの大切さを改めて認識したと同時に、そう考えると気持ちが悪くなることを実感しました。ミクロネシアの人々から学んだこの穏やかな気持ちを忘れずに、来年の春から社会人として頑張っていきたいと思っています。

参加した COM-FSM 学生の声

プログラムに参加した4名の学生のうち、2名の感想文を掲載しています。(APIC 和訳)

上智大学にて研修



ロザリン・アルバート さん
Rosalyn Albert

APIC の短期交換留学プログラムに参加することができ、私はとても恵まれていると感じました。日本での滞在中、素晴らしい体験をたくさんすることが出来ました。滞在期間は約2週間と短いものでしたが、日本人の優しさ、丁寧さに触れる中で、多くの学びがありました。日本での滞在中は、私の国と比べ時間の流れがとても早く感じ、全てが違って見えました。

私がこのプログラムに参加した理由は、日本での留学に挑戦したいと考えていたからです。これから日本で得た経験、そして APIC に対する感謝の意を忘れずに、精一杯努力していきたいと思います。また、このプログラムが一つのきっかけとなり、日本とミクロネシア連邦の関係がさらに強化されることを願っております。本プログラムに携わって頂きた方々に重ねて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

滞在中のスケジュール

11/4 (日)	来日
11/5 (月)	ウェルカムパーティ オリエンテーション キャンパスツアー
11/6 (火)	上智大学にてミクロネシア・デイに参加
11/7 (水)	ミクロネシア・デイに参加 日本語授業
11/8 (木)	テンブル大学ジャパンキャンパス校にて オリエンテーション 講義
11/9 (金)	フィールドトリップ (浅草)
11/10 (土)	休日
11/11 (日)	祖師谷寮トライアングルフェスタ
11/12 (月)	講義 上智大学にて環境セミナー受講
11/13 (火)	講義
11/14 (水)	日本語授業
11/15 (木)	秦野市小学校にて英語の授業に参加 APIC 主催レセプション
11/16 (金)	フィールドトリップ (鎌倉)
11/17 (土)	ホームステイ
11/18 (日)	離日

麗澤大学にて研修



ディロン・クラーク さん
Dylon Clark

私の故郷から遠く離れた国へ行くという事で、プログラム参加前はとても不安でした。しかし空港に到着して日本の大学生から温かい歓迎を受け、私の不安はすぐに消えました。

大学では、ポンペイにも来たことがある麗澤大学学生の池田君が大学を親切に案内してくれたり、日本での遊びを教えてくださいました。日本での生活の中で印象に残っていることは、ホームステイと秋葉原観光、そしてテンブル大学ジャパンキャンパス校 (以下 TUJ) でのキャンパスツアーです。

ホームステイでは、松村滞さんとそのご家族に大変お世話になりました。ご家族はとても親切に私を迎えて下さいました。松島教授や学生に連れられていった秋葉原観光では、「素晴らしい」という単語を覚えました。コスプレをしている人であふれている町の雰囲気や、そこで味わったラーメンの味が「素晴らしい」からです。最後に、TUJ でのキャンパスツアーでは、大学の雰囲気を知ることができただけでなく、講義にも参加し日本という国を麗澤大学での学びとはまた違った角度から見る事ができました。

麗澤大学の仲間達は私にとって大切な「家族」であり、これからもこの絆を大切にしていきたいと思います。滞在中に学んだ日本語や日本文化はこれからさらに勉学に励むうえで大きなモチベーションとなりました。APIC のこのプログラムに参加できたことは、かけがえのない思い出です。本当にありがとうございました。

滞在中のスケジュール

11/4 (日)	来日
11/5 (月)	ウェルカムパーティ オリエンテーション キャンパスツアー
11/6 (火)	講義ガイダンス
11/7 (水)	講義 ウェルカムパーティ
11/8 (木)	テンブル大学ジャパンキャンパス校 にてオリエンテーション 講義
11/9 (金)	フィールドトリップ (浅草)
11/10 (土)	ホームステイ
11/11 (日)	ホームステイ
11/12 (月)	上智大学にて環境セミナー受講
11/13 (火)	講義
11/14 (水)	講義
11/15 (木)	講義 APIC 主催レセプション
11/16 (金)	講義 小学校にて交流活動
11/17 (土)	フィールドトリップ
11/18 (日)	離日



東京タワーにて

2018年11月4日から11月18日にかけて、APICの支援によりミクロネシア短期大学 (COM-FSM) から4名の学生が来日し、約2週間の短期留学を経験しました。

4名のうち男子学生2名は麗澤大学、女子学生2名は上智大学にてそれぞれ受講するとともに、日本人学生との交流やホームステイ等を体験しました。

麗澤大学では、学内では異文化コミュニケーションや国際関係の授業を聴講し、麗澤大学で学ぶ日本人学生とともに授業に参加しました。学外では、同大学の学園祭への参加や秋葉原、東京タワーを巡る都内観光を通して日本ならではの体験をすることができました。

上智大学では、日本語の授業や国際関係論を学ぶ授業に参加すると同時に、小学校での英語教育の実習にも挑戦しました。学外では浅草や鎌倉などの名所を訪問し、浮世絵体験や日本舞踊体験を通して日本文化への理解を深めました。短期留学中は上智大学の寮である祖師谷国際交流会館に滞在し、世界各国からくる学生と生活をともにしました。

2つの大学にて研修を行う本プログラムですが、共同で行う活動として本年は環境セミナーの開催やテンブル大学日本校でのキャンパスツアー、日本人学生や大学職員宅でのホームステイ体験を実施しました。中でもホームステイ体験は日本人の家族と過ごす特別な時間だったとそれぞれの学生が話していました。



本プログラムを締めくくるレセプションパーティでは駐日ミクロネシア大使館関係者の方々の臨席のもと、杉村美紀上智大学副学長、山本浩上智大学短期大学学長、松島正明麗澤大学教授ほか、本プログラムをサポートしてくれた日本人学生、APIC関係者らが参加し親睦を深めました。パーティ終盤では上智大学アカベラサークル L'arbre de harmonie による演奏や上智大学、麗澤大学学生による今夏ミクロネシア連邦で行った活動の報告、短期留学生のプログラム報告等を行い、会場は大いに盛り上がりました。

今回は昨年に引き続き、3回目のCOM学生受け入れとなりました。プログラムに参加したCOM学生や日本人学生は短い間の交流でしたが、かけがえのない時間を過ごす事ができました。これからも学生同士の「絆」を大切にし、ミクロネシア連邦と日本の交流のさらなる発展を期待します。

(文責：金原)

テンブル大学ジャパンキャンパス校にて。ミクロネシア連邦の国旗 (上から2段目右端) を指差す学生たち

ミクロネシア短期大学・学生招待計画 上智大学及び麗澤大学にて短期留学の受け入れ



左から：モリ駐日ミクロネシア連邦大使館公使、APIC 佐藤理事長、フロイド・タケウチ氏、東洋大学福川理事長（当時）、竹村学長

2018年11月6日から12月6日までの約1カ月間、写真家フロイド・タケウチ氏の作品を展示した「ミクロネシア写真展『南洋の光』」（APIC主催、東洋大学共催）が、東洋大学で開催されました。

写真展の開催初日の6日に東洋大学白山キャンパス8号館において開会式が行われました。開会式には東洋大学の福川伸次理事長（当時）と竹村牧男学長を始めとする東洋大学関係者、及びAPIC関係者が集いました。

写真展では、タケウチ氏が撮影したミクロネシア連邦チューク州を舞台にした16枚の写真が展示されました。ミクロネシアにある四つの州の中で最も経済発展が遅れ、多くの人がアメリカ本土やグアム、ハワイに移住しているのが現状であるチュークに降り注ぐ二つの光に焦点が当てられました。一つは、チュー

ク環礁を取り巻く、美しい島々にふり注ぐ力強く鮮やかな自然の光。もう一つは、チューク州ウエノ島にあるマブチの丘を静かに照らす知識の光です。マブチの丘には、APICが支援するザビエル高校が建っています。

また、写真展の開催に併せて、学生にミクロネシアに対する理解を深めてもらうと、11月4日にタケウチ氏による講演会が行われました。これまでの15年間でタケウチ氏が撮影してきた写真を紹介しながら、それぞれの写真に込められた意味や、どのようにして撮影したかなどについての話がありました。

講演会終了後、タケウチ氏は東洋大学写真研究会の学生が教室で展示している写真を見学しながら学生メンバーと意見交換をしました。タケウチ氏は専門家の見地から様々な意見を述べ、学生にとっても良い機会となりました。



写真研究会のメンバーと写真を鑑賞するタケウチ氏



講演会の様子

NOV
11

東洋大学にてミクロネシア写真展「南洋の光」開催



2018年11月2日に開催された日本・ミクロネシア連邦外交関係樹立30周年記念式典（ミクロネシア連邦大使館主催）に合わせ、隣接する会場において、写真家フロイド・タケウチ氏の作品を展示した「ミクロネシア写真展『南洋の光』」（APIC主催、ミクロネシア連邦大使館共催）をホテルニューオータニ「翠鳳の間」にて開催いたしました。記念式典には800名ほどが来場し、盛会となりました。

写真展会場には今年度で4年目となった上智大学実践型プログラム「ミクロネシア・エクスポートジャーツアー」実施中の様子を紹介するビデオも上映され、来場者は学生たちの現地での学習や現地の人々との交流を楽しむ様子などを鑑賞しながら、学生の活動の様子を通して、ミクロネシアの豊かな自然や人々の温かさを感じ取っていました。



また、記念式典に出席していたミクロネシア連邦ピーター・M・クリスチャン大統領、ローリン・S・ロバート外務大臣も写真展会場に来場し、展示されていた写真に興味深く見入っていました。ミクロネシア連邦本国においても、APICの活動が広まることが期待されます。

（文責：斉藤）



（写真提供：ミクロネシア連邦大使館）



写真展会場を訪れたクリスチャン大統領及びミクロネシア連邦関係者

NOV
11

日本・ミクロネシア連邦外交関係樹立30周年記念式典での写真展



APIC 佐藤嘉恭理事長との面会にて。中央：ゴンザルベス首相

外務省の招聘プログラムで、セントビンセント及びグレナディーン諸島よりラルフ・ゴンザルベス首相が来日され、2018年8月6日、APIC主催の歓迎夕食会を開催いたしました。

夕食会には、岡本三成外務大臣政務官、猪口邦子参議院議員、橋本久美子元首相夫人、アリコック駐日ジャマイカ大使、中米カリブ関係者などが

出席しました。翌々日が首相の誕生日ということもあり、APIC佐藤嘉恭理事長よりサプライズでバースデーケーキがプレゼントされ、和やかな雰囲気の中で参加者との懇親を深め、盛会となりました。

帰国後、現地の取材でも佐藤理事長との面会について言及しており、今回の来日をとても印象深く感じられたようです。

(文責：斉藤)



る環境保全シンポジウム」を開催して以来、環境セミナーシリーズとしてパラオ(2015年8月)、ジャマイカ(2016年10月)、マールシャル諸島(2017年3月)、バルバドス(2017年9月)、ミクロネシア(2018年3月)と各地で環境セミナーを開催してきましたが、2018年9月27日、カリブ地域では3回目となるセミナーを、トリニダード・トバゴにある西インド諸島大学(The University of the West Indies(以下「UWI」)セント・オーガスティン校において開催しました。今回の講師は、過去と同様に、上智大学とAPICの間で締結された連携協定に基づき、同大学大学院地球環境学研究科のあん・まくどなるど教授です。

今回の環境セミナーには、岡田光彦駐トリニダード・トバゴ日本国大使ご夫妻、UWI副学長、科学技術学部長、地震研究所所長、生命科学学部長、メキシコ大使館書記官、EU代表部、UNDP代表部、UWI教授陣、大学院生など、約75名との多数の参加がありました。司会は、ゴビン(Dr. Gohin)科学技術学部学部長で、コブーン(Dr. Cockburn)生命科学部学部長と岡田大使の歓迎の辞に続いて、荒木恵理事兼事務局長がAPICの活動の紹介も含めて環境セミナーの開催について主催者として挨拶をしました。

UWI側が「災害管理戦略」(Disaster Management Strategies)についての講演を希望していたので、まくどなるど教授は、自身が東北の震災の後で漁村の復興に携わった経験をもとに、住民がどのように結束して復興に取り組んでいるかというを中心に話されました。約1時間半の講義のあと、質疑応答の時間では、コミュニティがどのように協力して取り組んでいるのか、コミュニティの自主的な活動か、それとも政府の関与や命令に基づいた活動なのか、専門家(技術者)の助言と住民の意見は必ずしも一致しないと思われるが、どのように折り合いをつけているのかなどといった質問が多数出ました。日本において、災害時には住民が冷静に対処し、コミュニティが一丸となって復興に取り組んだり、また、治安が悪化しない、ということがトリニダード・トバゴの方々にとって驚きのようでした。

このセミナーの前日には、UWI工学部の教授陣とワークショップを開催し、まくどなるど教授が約1時間、東

北の津波の被害の写真を見せながら、地域社会が協力して復興に取り組む様子について説明しました。トリニダード・トバゴでは、災害は他人事と考えている人が多いとのこと、ここでも、日本人がコミュニティとして纏まって取り組むことが驚かれていました。

また、この機会に、カリブ諸国連合(ACS※)で、若手職員(約20人)に対して、まくどなるど教授が約2時間、日本で働き始めた経緯や、日本の漁民や農民が気候変動にどのように対応しているか事例を紹介しながら説明しました。

(文責：加藤)



ACSでの講義の様子

2018年9月27日、トリニダード・トバゴにおいて、カリブ環境セミナー2018を開催しました。

APICは、2015年7月に上智大学と共催で「太平洋地域におけ

西インド諸島大学卒業生

ディーン・ミラーさん

西インド諸島大学（UWI）モナ校の卒業生で、「太平洋・カリブ学生招待計画2016」の参加者でもあったディーン・ミラー（Dane Miller）さんが、日本の大学院に留学するため2018年4月より来日しています。今回はディーンさんに、留学を決めたきっかけ等についてインタビューを行いました。（聞き手：インターン生 中村、藤崎、森内）（APIC和訳）

■自己紹介をお願いします。

みなさん、こんにちは。ディーン・ミラーです。ジャマイカ出身です。私は小さい頃から算数が好きで、また父の影響を受け、IT関係の分野に惹かれ、勉強し始めました。自分の技術を用いて多くの課題を解決していく父の姿に憧れを抱きました。ジャマイカの大学ではロボットエンジニアを目指していたのですが、IT分野の授業を専攻し始めてから二年後、プログラマーという新しい道を見つけました。その後、文部科学省の国費留学生に合格し、2018年4月から日本の東京工業大学で勉強しています。

■現在通っている東京工業大学の大学院では、どのようなことを学んでいますか。

私は、ヘルスケア分野、特にリハビリテーションにおけるAI（人工知能）について学んでいます。私が

主にやっているのは、ヘルスケアにおける人間とコンピュータ相互作用を始めとするエンジニアリングです。研究のアプローチはいろいろある中で、私がいる研究室では、バーチャル・リアリティ（拡張現実）の技術を歩行リハビリテーションに活用する研究を主にしています。

■なぜテクノロジー分野、特にAIやコンピュータサイエンスに興味を持つようになったのですか。

先ほど述べたように、私は昔から算数が大好きでした。なぜなら、算数には必ずいつも答えがあつて、その問題を解いて答えを見つけだすのが好きだったからです。これは今でも変わりません。そのため、コンピュータサイエンスについても興味を持つようになりました。しかし、コンピュータサイエンスの中で特にAIに興味を持ったのには別の理由があります。私には医者になった友達がいるのですが、彼らに会うと自分と比較してしまっていました。友達が人の命を救っているのに、自分がやっているのはプログラミングなのかと思ってしまうことがありました。そこで、医者にならなくても人の命を救える方法はないだろうか考えるようになったんです。そして、テクノロジー分野について学んでいくうちに、AIなら人の命を救う手助けができるのではないかと思うようになりました。さらに、リハビリテーションの分野でAIを使う

Cの太平洋・カリブ学生招待計画で初めて日本に来て約一カ月間上智大学で勉強して、より一層日本のことが大好きになりました。「もう一度日本に行きたい」と強く感じさせてくれる貴重な体験でした。そのような機会を設けてくださったAPICの方々には感謝してもしきれません。

■日本での生活はどうですか？

日本は良い国です。安全で、清潔で、人々が親切で、食べ物がかつても美味しい。しかも住むのに便利です。コンビニや自動販売機がたくさんありますし、電車が時刻通りに来るのには驚きました。

日本で生活を始めて意外と大変だと感じているのは、日本人とコミュニケーションをとることです。私



2016年の「太平洋・カリブ学生招待計画」最終報告会でのディーンさん（左端）

は日本に留学する前、日本人の友人がたくさんできるだろうと思っていましたが、現実とは少し違いました。私はあまり日本人学生と話す機会がありません。なぜなら、彼らはほとんど英語を話しませんし、私の日本語もあまり上手ではないからです。でも私はあきらめていません。彼らと会話ができるようにベストを尽くそうと思っています。挨拶は積極的にするようにしているんですよ。

■なぜAPICの太平洋・カリブ学生招待計画に参加しようと思ったのですか。またそのプログラムに参加した感想を教えてください。

私がAPICのプログラムへの参加を決めた理由は、なんといっても日本の文化が大好きだったからです。私は高校生の時に折り紙を習い、それをきっかけに日本文化に魅力を感じるようになりました。プログラムの中で、日本社会についての講義を受けたり日本文化を体験したりしたことで、日本のあらゆる側面を知ることができました。その上で、日本とジャマイカを様々な観点から比べ、現在のジャマイカに必要なことに気づくことができました。

私を含めた多くの外国人学生にとって、このAPICのプログラムに参加する価値は大きいと思います。なぜなら、このプログラムを通してたくさんの方とつながりを得ることができ、それを母国に還元することで、母国の発展に寄与できると思うからです。私は帰国後、このプログラムを友達に紹介しました。彼らはとても興味を示してくれましたよ。今では、私がいた大学の日本語クラスの学生はみんなAPICのプログラムの存在を知っています。



インタビュアーのインターン生たちと

■コンピュータサイエンスを学ぶために、なぜ日本を選んだのですか。

私の母は、私がジャマイカから距離の近いアメリカへ留学することを望んでいました。ですが、私は日本以外の外国には興味がありませんでしたし、コンピュータサイエンスの分野において日本の大学は専門性があると聞いていました。さらに、二年前APIC

■ディーンさんは常に最大限の努力をしていて、学校の成績やプログラミングの大会などで良い結果を出していますが、自分の信念または原動力は何ですか？

私の中に特別な原動力というものは存在しません。ただいつも頭の中にあるのは、自分と全く同じチャンスに恵まれている人はそう多くはないということなんです。だからこそ、私はいつも自分のベストを尽くそうとします。また、両親など自分に期待してくれる人たちががっかりさせたくないんですよ。彼らには「おお！ディーンにはこんなこともできるのか！」と思ってもらいたいです。

■卒業後の将来に向けた計画や具体的なイメージはありますか？

もしジャマイカに帰国すればジャマイカの発展に貢献していけると思います。最初は母国ではない場所働き、様々な経験を積みたと思っていきます。新しい経験から何か吸収することができれば、ジャマイカに技術を持って帰ることが出来るかもしれないと考えたからです。私は人々の助けになる仕事を通じて、世界に貢献していきたいと固く心に決めています。

西インド諸島大学

University of the West Indies

西インド諸島の17の国と地域で英語による高等教育を行う大学。3つのメインキャンパス（ジャマイカのモナ校、トリニダード・トバゴのセント・オーガスティン校、バルバドスのケイプヒル校）の他、通信制のオープンキャンパスが各地にあり、英語を公用語とするカリブ諸国における最古にして最大の高等教育機関として、様々な分野に人材を輩出している。

第2回「ハイチ便り」

寄稿：在ハイチ日本国大使（当時） 八田 善明



APIC ウェブサイトでは、2018年2月から毎月一回、八田善明 在ハイチ日本国大使（当時）寄稿の連続コラム「ハイチ便り」を配信しております。日本で知られることの少ないハイチ共和国の政治、社会、文化などについての情報を発信し、日・ハイチ関係の増進を目指します。本ページでは、第2回「ハイチ便り」～ハイチ社会事情一般について～ の内容を掲載しています。その他の「ハイチ便り」については、こちらのページ (<http://www.apic.or.jp/projects/haiti000.html>) をご覧ください。

前

回は、ハイチの歴史的経緯から現状までを足早に概観しました。今回は、よりハイチを理解する前提となる社会事情や人々の日常・生活感についても少し掘り下げておきたいと思います。

■ハイチの国名

まず、国名のハイチは、日本語ではハイチですが、フランス語・Haïtiでは、読みの上ではアイティ（チに近い短いティ）になります（フランス語では、Hの音（ハ行と派生の音がないためです）。クレオール語・*ayiti* もアイチですが、フランス語とは若干トーン・イントネーションは異なります。ハイチ（アイチ）は、「高い山の地」を意味する専ら先住民のタイノによる島の呼称を独立時に採用したもので、その名のとおり、国土的にも思いの外高い山（ハイチでは2,600m）があるなど、起伏に富んだ地形をしています。

■地域で唯一のフランス語国

ハイチでは、歴史的過程で、アフリカ系の言語にハイチの元々の住民の言語、フランス語、スペイン語、そして英語も単語ベースで入ってくるなどによって（ハイチ）クレオール語が形作られてきました。そのため、ハイチではほとんどの人が日常語としてクレオール語（Créole (仏) 'keyol' (クレオール)) を話しますが、

公用語になったのはかなり後になります（憲法レベルでは、1987年）。

それまでの公用語はフランス語のみで、中南米地域においては唯一のフランス語公用語国です。逆に、スペイン語や英語が主流の中南米地域においてやや肩身の狭い思いをしている面もあります。例えば、英語がメインの「カリブ共同体（CARICOM）」では、後発で2002年に加盟したハイチは、フランス語も公用語に加えるべく働きかけを行って来ます。2013年の元マルテリー大統領時代には、フランス語を公用語とするこのについての「決議」まではこぎ着けましたが、これを実際に公用語として採択するには至っていません。丁度2018年前半は、ハイチが2回目のCARICOMの持ち回り議長国（6か月間）であったことから、モイーズ大統領がフランス語公用語化についても主張しましたが、費用・マンパワーが大幅に増えるといった現実的な問題もあるためか、まだ公用語化の実現の目処はたっていないさそうです（★ハイチがホストした首脳会議では、自前でフランス語の同時通訳を導入する等努力をしています）。なお、今回のCARICOMでは、フランス語だけでなくクレオール語（とオランダ語）についても公用語にするべきと要請しました。このような多言語・多様性主義による理想は、欧州連合（EU）にもその理念と実

践がみられ、フランス語国の一つとしてハイチがそれを主張するのは自然とも言えますが、一定程度は受け入れられても現実的問題により課題に留まるところが興味深いところです。また、米国との距離も近く、米国には大きなハイチ人コミュニティもあり往来も盛んなので、よりアメリカベースの生活をしている人同士では英語を日常的に使う人も増えていると思われるます。また、隣国や中南米地域との関係もあるので、スペイン語を使用する人もいます。

■ハイチの気候と自然

ハイチは、気候的にみた場合、熱帯海洋性気候で、日中の直射日光下はかなり暑くなりますが、日本の夏のように夜も暑い時期はおそらく7、8月の二か月が中心で、その前後は夜も暑く感じる時期はありますが、それ以外の雨期等は日没以降気温も落ち着き、明け方は寒い位のこともあります。あまり地域によって気候の差があるように感じませんが、標高によってかなり異なります。ポルトープランス (Port-au-Prince) から富裕層の活動する隣のベチヨン・ビル (Pétion-Ville) までは上ると既に標高は400メートルを超え、温度にして2度近く下がります。さらに上ると高級住宅地の一つであるモルヌ・カルベール (Morne-Clavire) 等になり、さらに数度温度が下がります。

そのまま南下してフルシー (Furcy) 方面へ山の方（セル (Selle) 山脈）へ向かい、標高1,500メートル前後のところには別荘もあるような冷涼な地域（ケンスコフ (Kenscoff)）もあり、首都圏への野菜の供給地にもなっています。季節にはイチゴ等も出荷するなど、それら野菜のクオリティや種類は年々改善されてきており、同地域ではやっていなかったコーヒーの栽培にもチャレンジしようといった話も聞かれています。

また、沿岸部では、期待どおりカリブ海のビーチがあります。ただし、海岸線はそれなりに入り組んでおり、必ずしも砂浜のビーチだけというわけではありません。なお、海岸線を航空機の窓から見た印象では、アクセス道もないことから手つかずの海岸線も多々あり、乱開発さえしなければ観光資源としてのポテンシャルはとても高いものと思われました。

■ハイチの交通

ハイチでは、国土を10の県に分けて行政が敷かれており、首都ポルトープランスは馬蹄形の国土の奥、ゴナーヴ湾の奥に位置し、それなりに良好に舗装された幹線道路により中央・北部や南部の一部主要都市と接続がなされています。なお、高速道路はなく、鉄道に至っては、郊外・市街地共に今はありません。自家用車を持つっている人以外の主要交通手段は、タ

プタブと呼ばれる乗り合いタクシー（バス）か、バイクタクシーになります。そのほか、大型の観光バスも大都市間や隣国のドミニカ共和国を結んでいます。タクタブは、市街地ではピックアップの荷台を改造してベンチシートを両脇に配した後ろから乗降する乗り合い自動車で、サッカー選手や歌手、キリスト教の文官等ベンキで極彩色に思い思いの装飾が施され、郊外や都市間を結ぶ大型のマイクロバス型のものもあるようです。バイクタクシーは、運転手と2人乗り、4人乗りで移動する手段となっており、タクタブよりも乗車賃は割高になりますが、女性も通学の子供も関係なく普通に利用しています（運転手入れて最高7人まで目撃したことがあります）。圧倒的に中国製が多いこのバイクタクシーは、かなりの山道、砂利道でも3、4人乗りで移動して行きますので、効率は（かなり）良いとは言えますが、良くあのタイヤで！と、感心や、はらはらのし通しです。首都圏では逆に、個人のオートバイ、自転車はあまり普及していない印象ですが、地方都市になると学生も含めてオートバイ率が高くなる印象です。

■ハイチの一般建築

建築は、所得層によって大きく差が開きます。スラム等の貧困層では、木の棒になんらかのシートやトタン板をつけた

小屋か、ブロック積み壁にトタン板を打ち付けた小屋等が多いです。都市部の建築物となれば、南欧等でもよく見られる、鉄筋コンクリートの柱にコンクリートの床を構築し、さらに次の階の柱を立て、といった手順でビルを建て、後から壁をコンクリートブロックで埋めていく建築が多く見られます。なお、建築現場を見ている感じでは必ずしも耐震性が十分でないように思われる建築も多く感じられます。また、屋根はトタン屋根が多かれ、コンクリートやブロックの壁の上に角材で骨組みをやぐら状に組み、その上にトタン板を張っていく方式が多く用いられています。壁と屋根の間に通気の隙間があることが多く、また、窓には格子のみでガラスが最初から入っていない建物も多く、ガラスやサッシが入るのは一定の収入があるような家になります。これらの家屋は、気候との関係で、



上二つ：タプタブ 下：ハイチ共和国行政地図

ほとんどの季節において風が抜けて快適に過ごせる造りとも言えますが、ハリケーン等の際には強風が窓から吹き込み、屋根を中から持ち上げてしまうためか、屋根が吹き飛び壁だけが残っているような被害が多く見られました。ある意味、トタン屋根は被害後の復旧も早いと言えますが、早いですが、屋根が飛ばされると雨水による浸水もひどく、それだけ復興も遅れ、かつコレラ等も含めて病気が蔓延しやすいとなりますので、環境として脆弱と言えます。

以上、気候、交通、一般の住居等、生活の様子の一部を御紹介して参りました。まだまだ生活面だけでも述べ足りないですが、今回は趣向を変えて別のテーマにしたいと思います。

（※写真は筆者が撮影）
（※本コラムの内容は、筆者の個人的見解であり、所属する機関の公式見解ではありません。）

参加記者一覧



フィジー

アニッシュ・チャンド (Anish Chand) 氏

「Island Business」誌記者

Island Business 誌は、1974 年創刊。発行部数は 8,000 部。ウェブサイトへのアクセスはリニューアルした 3 年前から通算 1,000 万アクセスを誇る。読者の年齢層は大学生から企業の幹部まで広い範囲。オンライン版は、米国次いで、豪州、英国からのアクセスが多い。



アメリカ領サモア

モニカ・ミラー (Monica Miller) 氏

「Southseas」放送 ニュース・ディレクター

Southseas 放送は、2000 年に創設された放送局で、2 のラジオ局、ケーブルテレビ、そしてニュースウェブサイト talane.com を持つ。ニュースサイトへは毎月約 4 万アクセスあり、リスナーやウェブサイトを閲覧する人の年齢層は 18 歳から 65 歳が中心。



パラオ

カンベス・ケソレイ (Ongerung Kambes Kesolei) 氏

「Tia Belau」紙、「Pacific Island Times」紙、「Pacific Note」紙 編集長

「Tia Belau」紙は 1973 年の創刊。パラオで発行されている 2 紙のうちの 1 紙で、発行部数は 1,100 部。月曜と木曜の週 2 回発行。「Pacific Island Times」紙は、2016 年 4 月に発行を開始した月刊紙。発行部数は 2,500 ～ 3,000 部。ミクロネシア西部 (グアム、サイパン、パラオ) で読まれている唯一の新聞。ウェブサイトには、他のミクロネシア地域からのアクセスもある。「Pacific Note」紙は、2016 年 4 月に創設。主にパラオ関連のニュースを扱う。「Pacific Island Times」紙と「Pacific Note」紙は、印刷版で提携している。



トリニダード・トバゴ

キム・ブードラム (Natalie "Kim" Boodram) 氏

「Trinidad Express」紙 シニア・ジャーナリスト

「Trinidad Express」紙は、トリニダード・トバゴで 2 番目に古い日刊紙で 1967 年創刊。発行部数は 7,500 部で、同国の人口の約 40% に読まれている。オンライン版は、1 日に約 1 万アクセスある。



セントビンセント及びグレナディーン諸島

ケントン・チャンス (Kenton Chance) 氏

「iWitness News」創設者・編集主幹 (編集長)

iWitness News は、2007 年に Chance 氏が学生時に創設したオンラインニュース。2013 年にビジネスベンチャーとして起業。ウェブサイトにはセントビンセント・グレナディーン諸島の他に、米国、カナダ及びカリブ諸国から毎月約 10 万アクセスある。



平澤 碧惟 (Aoi Hirasawa) さん

APIC「ジャーナリズム・インターンシップ」参加学生

津田塾大学
学芸学部 国際関係学科 4 年



西崎 奈央 (Nao Nishizaki) さん

APIC「ジャーナリズム・インターンシップ」参加学生

上智大学
文学部 新聞学科 4 年

Photos by Floyd K. Takeuchi / Waka Photos



フォーリン・プレスセンターにて

2018 年 10 月に APIC と公益財団法人フォーリン・プレスセンター (以下、FPCJ) の共催で「太平洋・カリブ記者招待計画」が開催されました。本プログラムは今年で 4 回目を迎え、毎年「環境と防災」をテーマに、太平洋・カリブ地域で活躍するジャーナリストを招待しています。記者団は 10 月 21 日から 31 日の 10 日間、東京と沖縄県久米島、宮城県の仙台、松島の各所を周り取材、記事の執筆を行いました。

今回のプログラムには、アニッシュ・チャンド氏 (フィジー)、モニカ・ミラー氏 (アメリカ領サモア)、カンベス・ケソレイ氏 (パラオ)、キム・ブードラム氏 (トリニダード・トバゴ)、ケントン・チャンス氏 (セントビンセント及びグレナディーン諸島) の 5 名が参加しました。また、約 40 年にわたりアジア太平洋地域でジャーナリストとして活躍するフロイド・タケウチ氏と約 30 年間日本でジャーナリストとして働くドーン・マタス氏の 2 名のコーディネーターが参加した記者の取材、記事の作成にアドバイスを行いました。そして、今年度は、「ジャーナリズム・インターンシップ」として学生インターンを津田塾大学と上智大学から 1 名ずつ募り、上智大学から西崎奈央さん、津田塾大学から平澤碧惟さんが参加しました。学生インターンを受け入れたのは、学生にとって、プロのジャーナリストがどのように取材をし、記事を書くかを学ぶ機会になり、また、参加記者にとっても日本の若者の考え方に触れることが出来るという双方の効果を期待

してのことです。

記者たちは毎日計画された取材スケジュールに従い、自分の関心のある事項について一日必ず 1 本「ストーリー」と呼ばれる記事を書くことが課されました。一日の行程を終えた後、編集会議を開き、視察内容を深めた上で「何について書くか」を話し合いました。その後、定められた時間までに記事をコーディネーターに提出することが決まりました。執筆された記事は各国の所属メディア機関を通してリリースされます。学生インターン生は取材活動、編集会議に参加、10 日間の全ての行程を共にしました。そして、毎日 1 本のストーリーの代わりに、参加記者の人生観や人柄にフォーカスする「Profile of a Person」と呼ばれる記事を執筆しました。



日本での取材をもとにチャンド氏が執筆した記事 (2018 年 11 月 5 日「The Fiji Times」掲載)

プログラム初日、記者団はFPCJを訪れ、APIC佐藤嘉恭理事長、荒木恵理事・事務局長、FPCJ赤阪清隆理事長との懇談を行いました。佐藤理事長は「日本には、6,000以上の島々があり、島国として共有できる経験があるのではないか」と述べ、記者団を激励しました。その後、外務省やJICAでは、防災や環境分野における日本との協力関係についての説明を受け、熱心に議論を交わしました。気象庁では、自然管理や災害通知のシステムについて理解を深めました。

二日目は、日本の先進的な廃棄物処理を取材するため、川崎市のマンションを訪れ、住民のゴミ出しや実際のゴミ収集の現場を見学した後、分別収集された廃棄物が再資源化される資源化処理施設を訪れました。さらには古紙を利用したトイレットペーパーを生産するコアレックス三栄株式会社にて、古紙再生技術を視察しました。記者団は、同社の特殊な技術に関心を持ち、積極的に質問していました。最後に東京消防庁へ向かい、震度7の地震を実際に体験しました。

三日目の午前中は、洪水防御施設である首都圏外郭放水路を見学しました。洪水を地下に取り込むこの施設は、地下のパルテノン神殿といわれるほどの巨大な空間をもち、その規模の大き

さに記者たちも驚いていました。その後、防災面で最先端の機能を備えている東京スカイツリーにて、タワーの免震構造について説明を受け、一般には非公開のタワーの支柱を視察しました。夜にはAPIC主催の夕食会が開かれました。それぞれの記者はスピーチを行い、日本での取材にける想いを話してくれました。



APIC 主催夕食会にて

設を訪れ、島全体での環境循環プログラムへの取り組みを視察しました。久米島町役場の職員との夕食交流会では、職員の方々に沖縄三線を披露していただき、記者たちには島住民の温かさを感じてもらいました。

宮城県仙台市では津波の被害を受けた震災遺構である荒浜小学校を訪問し、防災リーダーへの取材を行いました。津波避難タワーや津波避難施設として併設される海岸講演冒険あそび広場では当時の様子を振り返ると共に現在の取り組みを視察しました。

東松島市では、津波が襲った野蒜駅周辺を語り部の方と視察。河北新報社では、防災・教育室長の武田真一氏の講義を受け、防災をテーマに議論を深めました。河北新報社では、3・11後、防災・教育室を設立し、地域住民参加型の震災伝承・防災プロジェクトを立ち上げ、読者と共に考え、紙面を作っています。それに対して、コーディネーターを含めた記者たちは驚きを示していました。記者たちは「読者との距離が近くなり過ぎしまうことは、震災報道の客観性や平等性が失われてしまうのではないか。個人的な関係性を築かない方が良いのでは」と疑問を投げかけられました。そのことに対して武田氏は「人の命を守るのに、中立であることはできない。目の前に困っている



松島にて

人、危険に晒されている人を救わないでジャーナリズムとは呼べない」と答えました。チャンド氏は記事で「メディアの責任」という見出しでそのことについて触れ、「日本のジャーナリズムから学んだことは、ジャーナリストも人の命を守れるということだ」と述べていた。

最終日には、日本橋の茶友倶楽部空門で茶道と着付けを体験しました。着物に身をまとう自身の姿を写真に収め、東の間の日本伝統文化体験を楽しんでプログラムを終えました。

(文責：平澤 西崎)

プログラムを終えて

「自分がこの国の情報を人々に届ける」その責任を誰よりも強く感じている5人のジャーナリストに出会いました。

人口100万人、10万人、または2万人にも満たない彼らの国でジャーナリストはどのように働き、ジャーナリズムはどのように機能しているのだろうか、そんな想いでこのプログラムに参加しました。

パラオからの記者曰く、「記者は島に2人しかいない」とのこと。サモアからの記者も「ラジオのニュースルームには自分一人しか記者はいない。津波が起きた時は自分が人々のために情報を発信していかなければならない」と言っていました。どのジャーナリストも口をそろえて「記者になりたい若い人材を探すことに苦労する」とこぼしていました。小さなコミュニティで記者をするとい

上智大学 文学部新聞学科4年

西崎 奈央さん



うことは、皆に顔を知られ、批判を直に受けるということでもあります。「ジャーナリストは時には権力に立ち向かい、人を批判するが、小さな島国ではそれが身近な人であるため時には辛辣なバッシングを受けることもある」と記者たちは言っていました。

だからこそ、人々に正しい情報を送りたいという記者の揺るぎない信念と良心が必要になります。そこに立ち向かい、長い間ジャーナリストとして活動してきた彼らからはその気概を感じました。

プログラムを終えて

今回のプログラムは、日本の防災や震災について再考するきっかけとなったと同時に、記者の卵として多くのことを学べました。特に、来日した記者たちとの交流は非常に刺激的で、記者という仕事について考える良い機会となりました。

今回の記者団の出身地である、太平洋やカリブの島々の人口は多くても200万人程度、少ない所は2万人という所もあります。当然記者の数も少なく、彼らが島の中で重要な情報源を担っていることに驚きました。彼らヘインタビュー行い、それを英語でまとめる作業はとても大変でしたが、記者としての苦労や島ならではの問題、彼らの記者としての価値観など、興味深い話を聞くことができました。記事を書く際に、ベテランの記者に受けたアド

津田塾大学 学芸学部国際関係学科4年

平澤 碧惟さん



バイスも一生の宝です。

また、日々のプログラムの中で、一緒に見聞きしたものが記者の手によって実際の記事になる過程を知れたことも、勉強になりました。記者によって、着目する点や使用される情報、書き方はまったく違い、一つ一つの記事が勉強の材料となりました。今回プログラムを経て、記者としての視野が広がり、将来は海外でも働いてみたいという意欲が強まりました。



上智大学及び大学院入学式にて

ザビエル留学生奨学金は、2014年に始まった奨学金制度で、ミクロネシア連邦・チューク州のザビエル高校・上智大学・APICの三者間の合意に基づき、ザビエル高校から上智大学へと留学生を派遣するプログラムです。2014年の開始から2018年までで合計7名の学生が奨学金を獲得し、日本で勉学に励んでいます。

MCT留学生奨学制度は、上智大学・ミクロネシア自然保護基金 (Micronesia Conservation Trust (MCT))・APICの三者間の合意に基づき、上智大学大学院地球環境学研究科で修士号を取得するプログラムです。2017年のプログラム開始以降、現在では4名の学生がそれぞれの研究テーマを持ちながら日々、研究に打ち込んでいます。どちらのプログラムも高等教育を受けることが困難な島嶼国の学生へと、学士、修士の取得の機会を与える貴重な制度となっております。以下、今年9月に入学した4名の学生の所信表明です。(文責：喜多)

上智大学国際教養学部に入学

クロエ・アーノルド さん
Chloe Arnold

私はミクロネシアのチュークという小さな島の出身です。私は高校1年生の時からこの留学プログラム参加に向けて努力してきました。高校生活の4年間一所懸命勉強に取り組み、上智大学への進学が決まった時には信じられないくらい達成感を得ました。豊かな文化のある場所で勉強することだけでなく日本の文化について学ぶことも楽しみにしています。独特の文化と素晴らしい発展で知られる日本への留学は、自分の成功への第一歩になると確信しています。上智大学で教育を受けた後は、故郷に戻り社会の発展や向上に貢献したいです。

ポール・チャーリー Jr. さん
Paul Charley Jr.

私はミクロネシア連邦のコスラエという美しい島の出身です。この留学プログラムは、私が今まで与えられた中で最高の機会だと思ひすぐに応募しました。この奨学金は私に、家族に恩返しをすることができる希望を与えてくれて、ミクロネシアでも日本でも自分が動ければ新しい機会を得られると教えてくれました。ザビエル高校の同学年の中で二人にのみ与えられるこの機会を得られた時から今まで、後悔や恥ずかしさを感じたことはありません。日本で学ぶ機会を得られる代表の一人に選ばれたことに誇りを感じています。上智大学での学びを通し、ミクロネシアに貢献できるよう成長したいです。

上智大学大学院地球環境学研究科に入学

タマエ・ワグク さん
Tamae Waguk

私は美しい島コスラエに、愛する家族と住んでいます。私は、数年前に亡くなった父の影響で自然環境に興味を持ちました。気候変動の被害や災害のリスクに対するこの島の耐性を高め、土地の保護に貢献するために、よりよい知識を会得したいです。私がこのプログラムに応募したのは、日本という繊細で美しい国と上智大学という美しいキャンパスを持つ大学に魅力を感じているからです。日本で自分の研究を進められること、日本のユニークな文化を体験できること、ミクロネシアとは異なる教育システムを体験できること、そして上智大学で修士を取得できることを大変喜ばしく思います。

ラジキット・ルフス さん
Lajkit Rufus

私は上智大学で学ぶ機会を得られたことを誇りに思います。私の目標は、生態系に対する脅威が何かを明らかにしそれを軽減するために、環境保護の研究に専念することです。私は、環境を保護するために立ち上がり、他者を助けたいような人間になりたいです。また、マーシャル諸島がさらに発展しより良い国となるためには、良い教育を受けた能力のある市民が必要だと思うので、私は周囲の人々が環境に対して関心を持つよう働きかけたいです。そのため、環境科学を専攻し上智大学で修士を得ることは私にとって非常に重要なことだと考えています。

(APIC 和訳)



2018年9月20日上智大学で卒業式が行われ、ザビエル留学生一期生のメアリー・ヘレン・モリ (Mary Helen Mori) さんが上智大学国際教養学部から学士の学位を授与されました。メアリーさんはザビエル留学生奨学金制度ができてから初めての卒業生ということになります。メアリーさんのご家族や親戚の方々もミクロネシア連邦チューク州から駆け付け、ご友人やAPICの職員と共にメアリーさんの卒業を祝福しました。

卒業式にはザビエル留学生4期生のリアナ・ネイロリア・プレストン・アイロンズさんとご友人の三井まどかさんも出席し、メアリーさんのご両親がプレゼントした黒いガウンと鮮やかなレイを身に着け、嬉しそうな笑顔をカメラに見せてくれました。

また、同日の夕方には東京倶楽部でメアリーさんの卒業式を祝うために夕食会が開かれ、ご親戚やご友人の他、上智大学関係者の方や、ザビエル留学生のために奨学金の寄付をして下さった方々等合計70名ほどが集まり、メアリーさんの卒業を祝福しました。

夕食会の最初にはAPIC佐藤嘉恭理事長、学校法人上智学院佐久間理事

長、ジョン・フリッツ駐日ミクロネシア連邦大使からご挨拶と祝福の言葉をいただき、食事会が始まりました。食事の途中にも多くの来場者の方がメアリーさんとお話を楽しみ、しきりに写真を撮っている姿が印象的で、日本の留学が充実したものであったことが伺えました。

食事の後、会場でメアリーさんの4年間の軌跡をまとめたショートムービーを上映しました。これはAPICのインターン生が作成したもので、メアリーさんのご友人から写真やビデオレターなどを送ってもらい、"Oma's Journey" というタイトルをつけたものです (Oma はメアリーさんの愛称)。

ショートムービーの上映後には後輩のリアナさん、ソフィア会役員としてメアリーさんのお世話をしてくださった三溝様からお祝いのスピーチをいただき、その後、メアリーさんと、親族を代表し、メアリーさんの叔父であり、ミクロネシア連邦チューク州上院議員のラスター・ダニエル・メルサイ氏から感謝のスピーチがありました。

メアリーさんは卒業式の後、ミクロネシア連邦のチューク州に帰り、アメリカの大学院で政治学を学ぶ準備をするとのことでした。(文責：喜多)





ブラッドフォード・モリ (Bradford Mori) さん

ミクロネシア連邦チューク州出身。チューク州の環境保護庁で技術協力プログラムのマネージャーを10年間務める。ミクロネシア・チャレンジ※にも携わっていた。現在は上智大学大学院修士課程に在籍しており、ミクロネシアの環境問題に加えて、コミュニティを基盤とした政策への転換をテーマに論文を執筆中。

バーサ・レイユ (Bertha Reyuw) さん

ミクロネシア連邦ヤップ州出身。南太平洋大学で芸術と環境学の学士を取得。MCTの仕事を通してミクロネシア・チャレンジ※に携わっていた。現在は上智大学大学院修士課程に在籍しており、ミクロネシアの環境問題における女性の役割をテーマに論文を執筆中。

Q、環境面でミクロネシアの現状を他国へ周知するために、どのような活動をしていますか？

ブラッドフォードさん 環境問題は、異なる側面を多数持ち合わせているので環境会議を開き情報交換を行っています。また、環境会議は、ミクロネシアが抱える環境問題の現状を他国に知ってもらういい機会でもあります。

バーサさん ミクロネシアの環境問題について関心をもってもらうため、インターネットの普及に合わせてウェブサイトやフェイスブックで活動の情報発信をしています。そのため、活動の様子をビデオにも残しています。さらに、この情報発信は支援金を集めるためにも役立っています。

Q、他国からミクロネシアへの支援はありますか？

ブラッドフォードさん 私たちは、ミクロネシアの環境問題の事例を提示し、支援金が多く集まるよう努力しています。しかし、他国からいただいた支援金の多くは連邦政府や州政府が運用しており、各市町村団体には行き届

いていないのが現状です。私は、もっと市民が中心となったボトムアップの環境問題対策が必要だと考えており、それぞれのコミュニティに合った対策を考えなくてはなりません。

Q、日常生活で私たちが環境のためにできることはありますか？

ブラッドフォードさん ミクロネシアでは、積極的に2R (reduce, reuse) が行われ、着ることができなくなった民族衣装を女性が買い物袋に変え、販売する取り組みもあります。プラスチック袋ではなく、持参の買い物袋を利用するだけでも環境保全に役立ちます。

バーサさん 国ごとだけでなく、市町村ごとの取り組みが必要不可欠です。ヤップ州は、ミクロネシアで初めてプラスチック袋を禁止しました。そのため、どこのお店でも買い物袋を持参しなければいけません。

また、若い世代が環境問題に関心を抱くためには、各地の学校で環境問題に対する啓発活動を行うことが重要です。自分たちで町を綺麗にしようという気持ちが一番大切だと思います。

インタビューを終えて

◆ 古川 実加子 (津田塾大学2年)

今まではミクロネシアについての知識はなく、海拔の上昇もどこか遠い国で起きていることだと思っていました。しかし、お二人から、人の住む家が水没する話を聞き、水没した家の写真も見ていただいたことで、その深刻さを現実のこととして、より身近に感じることができました。

◆ 古川 真帆 (津田塾大学1年)

テレビ等で環境問題を見聞きすることはあっても、当事者意識を持ちながら環境問題を考えたことはありませんでした。しかし、政府などの取り組みだけではなく、地域の一人ひとりの取り組みが大切であることをお二人のお話から学びました。私もエコバック運動など、自分の出来ることから始めたいと思います。

◆ 良永 うめか (津田塾大学1年)

お話を聞いて、お二人の自国に対して貢献したいという強い気持ちと、上智大学での学びを実地にも活かしたいという姿勢が非常に印象的でした。環境問題解決をキャンペーン化しがちな日本人も彼らのように生活に活かすことが大切だと切実に感じました。



下段左から：インターン生の古川実加子さん、古川真帆さん、良永うめかさん

2018年7月6日に津田塾大学のインターン生は、APICとミクロネシア自然保護基金(以下、MCT)との連携協定に基づき、MCT留学生として上智大学大学院で学んでいるバーサさんとブラッドさんの2名から、ミクロネシアの環境問題に対するMCTでの取り組みについてお話をうかがいました。【聞き手：インターン生 古川(実)、古川(真)、良永】

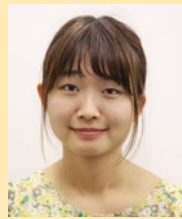
バーサさんは、ヤップ州での経験に基づきお話をしてくださいました。ミクロネシアでは奨学金やインターンなどを積極的に活用した、若いうちからの人材育成に力を入れています。資源が豊富なミクロネシアにおいて、保全活動は欠かせません。ミクロネシアチャレンジと題した保全活動では、海洋部門、地上部門、社会経済部門の3つに分かれ、活動をしているそうです。海洋部門では資源保護のため海に潜り、あらゆる種の魚、サンゴを観察し記録を取ります。地上部門では保護すべき土地を定め、その地域の人々の視点を取り入れ、保全活動を行います。また経済部門では、地域で定められたルールが有効的であるか見定め、フィードバックを行っているとのことでした。

ブラッドさんはチューク州での経験に基づきお話をしてくださいました。実際に保護地域に赴き、その状況をマップにまとめる作業を行っているとのことでした。集めた情報を地域の人たちに共有することで、彼らが現状を正しく理解することを目的としているそうです。2015年の台風によって海水温が上昇し多くのサンゴが傷ついたことや、高潮により海辺の家や作物などが被害を受けた塩害が問題となった際には、被害状況を正しく理解することが彼らに求められました。またMCTのみでは人と資金に限りがあるので、JICAをはじめとする他団体と協力して活動を行っているとのことでした。

二人は共通して地域の人々に環境問題に関するミクロネシアの現状を知ってもらうことが必要であると述べていました。そのため、現地の学校で環境についての授業を行っているそうです。活動を通して自然を守ることの大切さを理解してほしいという思いが感じられました。上智大学大学院に通う傍ら、帰国後、日本での経験をどのようにミクロネシアで生かしているかについて日ごろから考えているようでした。

※ミクロネシアの生物多様性を保全し、持続的な自然資源の利用を図るため、パラオ共和国、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国の3カ国およびグアム、北マリアナ諸島の2地域が2006年に合意したイニシアチブ。こうした活動のために、国毎に2020年までの積み立て目標額を設定し、その資金管理をミクロネシア自然保護基金(MCT)に委ねている。

—— インターンプログラム を 終えて ——



津田塾大学
学芸学部 2 年
古川 実加子 さん

私は大学の夏休みを活用して、1ヶ月間 APIC でインターンをさせて頂きました。将来必ず必要となる、社会でのマナーや礼儀を学ぶことができ非常に有意義な1ヶ月を過ごすことができました。この1ヶ月を通して一番感じたことは、人との繋がり的重要性です。私たちが APIC に来ることができているのも、高橋学長と APIC の関係があったからこそであると思うと人脈がいかに重要であるか理解することができました。また、この1ヶ月間 APIC の皆さんには大変お世話になりました。これからもこのインターンでの経験を生かし精進していきます。本当にありがとうございました。



津田塾大学
学芸学部 1 年
古川 真帆 さん

APIC でインターンをさせていただいたこの1ヶ月間、MCT 留学生インタビューなど多くの経験を積み、自分の仕事に大きな責任を持つことや積極的にコミュニケーションをとることの重要性を日々の活動を通して学ばせていただきました。APIC の職員の皆様が会議で活発な意見交換をなさっていたことが特に印象に残っています。また、外務省アジア大洋州局長 金杉憲治氏の講演会に参加させていただいたことも貴重な経験となりました。今回のインターンでは国際協力の現実を知り、自分の足りない点・これから学ぶべき課題を明確にすることができたと思います。この経験を生かし、今後の深い学びへとつなげていきます。APIC の皆様、ご指導ありがとうございました。



津田塾大学
学芸学部 1 年
良永 うめか さん

今回のインターンシップは、国際協力に興味を持ちながらも漠然とした理解しか持つことが出来なかった私にとって、大変有意義なものとなりました。普段の業務では、仕事すべてにおいて、オフィス全体で情報の共有と十分な検討をすることが求められているというのが印象的でした。また、早朝講演会で金杉憲治氏のお話を傾聴した際には、国際情勢に対する多角的な分析が大変参考になりました。今後は、今回の経験を存分に活かしながら、より充実した学生生活となるよう励んでまいります。最後になりますが、このような機会を与えて下さった APIC の皆様、津田塾大学関係者の方々に心から感謝申し上げます。

第1クール

津田塾大学 & 上智大学 短期インターンシップの 受け入れ

～ 2018 年夏期インターンプログラム～



津田塾大学
学芸学部 1 年
中村 彩乃 さん

APIC でインターンをさせて頂いた1か月間は私にとってとても充実した時間であり、多くのことを学ばせていただきました。私にとって特に大きな学びだったのは、国際協力の方法は一つではないということです。私が思い浮かべる「国際協力」とは発展途上国の人々に物資やサービスを提供することでしたが、APIC の事業は私が想像していたものと全く異なるものでした。このことから、自分がいかに狭い視点から「国際協力」を捉えていたのが気づくことができました。APIC での様々な経験を通して自分の視野を少しでも広げられたのではないかと思います。インターンを通して得たことをこれからの学生生活に生かし、さらに自分の視野を広げていけるように精進していきたいと思います。APIC の皆さん、素晴らしい経験をありがとうございました。



津田塾大学
学芸学部 1 年
藤崎 優香 さん

漠然と国際協力に関心がありましたが、なぜ自分が日本ではなく国際にこだわるのか、本当に自分のやりたいことは国際協力なのか、そんな疑問を少しずつ答えとして形にしていきたいと考え始めたインターンでした。以前は現地に足を運び、同じ境遇で生活を共にするからこそ本当の支援ができるのだと考えていましたが、実際の選択肢は想像以上に幅広く、自分の知識不足が自分の世界を狭めているのだと痛感させられました。約一か月の APIC での活動を通して、すべての業務に共通する「伝える」ことの大切さを体感しました。何か一つ成長した自分で帰ることができる、そんな新しく貴重な毎日でした。温かくご指導くださった APIC の皆様、そしてこのような機会を設けてくださった津田塾大学関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。



上智大学
総合グローバル学部 3 年
森内 みのり さん

今回 APIC でインターンをさせて頂いた一か月間を通して、「国際協力」に対する知見が深まっただけでなく、社会人としてのマナーや様々な場面において積極的にコミュニケーションをとることの重要性を実感しました。APIC の学生招聘計画に参加した留学生をはじめ、夕食会に参加していた方々など、職員の皆さんが様々な社会的・文化的背景を持つ方たちとどのようにコミュニケーションを図っているのか身近で見させて頂き大変勉強になりました。また、インターンを通して経験を積むことの重要性も感じ、私も大学生としての自覚を持って学業に専念できることを感謝しつつ、様々な経験を通して多くのものを吸収していきたいと思います。最後に、貴重な学びの場を与えて下さった APIC の職員の皆様や上智大学の方々はじめとする全ての方に心から感謝致します。

第2クール

参加した学生の多くは国際関係学科の学生や外交官志望の学生など、日本と海外の関係や国際協力に関心のある学生が多く、すでに国際協力に関する理論や知識を持っていることが印象的でした。そのような学生が APIC の実務を経験していく中で、国際協力という大きな枠組みの下には、日々の一人ひとりの小さな仕事があるという気づきがあったようです。

インターン生たちの今後の大学生活や将来に APIC でのインターンの経験が活きていくことを願っています。

(文責…喜多)

APIC と上智大学及び津田塾大学の間の教育連携に係る包括的な協定(MOU※)に基づき、大学のインターンシップ科目の就業体験として、2018年の7月～8月に夏期インターン生の受け入れを行いました。今年は実習期間を第1クールと第2クールの二つに分け、それぞれ3名ずつの学生が参加しました。期間中、インターン生たちはインタビュープロジェクトや講演会・夕食会の受付業務のほか、オフィスでの電話や来客の対応などを担当しました。また、APIC の事業に対する理解を深めるため、業務を通して学んだことや経験を元に、一人ずつ発表も行いました。

それぞれの期間中、インターン生たちが携わった主なプロジェクトは次のとおりです。

第1クール (7月3日～7月27日)

7/6 (金)	APIC-MCT 留学生へのインタビュー (P.35 参照)
7/17 (火)	中間発表
7/19 (木)	第 349 回早朝国際情勢講演会
7/27 (金)	最終発表

第2クール (7月26日～8月24日)

8/3 (金)	西インド諸島大学卒業生 ディーン・ミラー さんへのインタビュー (P.25 参照)
8/6 (月)	セントビンセント及びグレナディーン諸島首相歓迎夕食会
8/20 (月)	(株) NID 小森取締役最高顧問 へのインタビュー (P.3 参照)
8/24 (金)	最終発表

※ "Memorandum of Understanding" の略

APIC では、グローバル人材育成の一環として長期インターン生を受け入れています。これまで長期インターン生として APIC の事業に携わってきた大高さんに、印象に残っているプロジェクトや、大学卒業後の進路について聞きました。



NHK 高知放送局 記者

大高 彩果 さん

Photo by Floyd K. Takeuchi / Waka Photos

太平洋とカリブの地域から現役記者を招く APIC の取り組み「太平洋・カリブ記者招待計画 2017」に参加したことが特に印象に残っている。環境・防災をテーマに行われたこの取り組みは、現地で活躍する記者を日本に招き、各国が抱える課題の解決のヒントになるような日本の取り組みを紹介したり、日本が抱えている課題について共有したりして、取材を深めることが目的だ。去年10月、太平洋とカリブの地域からあわせて6人が来日し、東京、京都、宮城を訪ねるプロジェクトに同行した。

みんなで地蔵に向かって手を合わせた日がある。東日本大震災により発生した人的被害のうち、死者が1,109人、行方不明者が24人に及んだ東松島市を訪れた日のことだ。海のすぐそばにあった寺が、津波に流された。住職も亡くなったという。その跡地には、笑顔の「おじょうさん」が建っていた。途中から津波に流され行き先もなく付む線路、持ち主が分からず残されたぼろぼろの家。そんな光景の広がる東松島を訪ねて、6年という時の重みが分からなくなった。

「“Leave or die” A devastated Japanese town fights back」。ジャマイカの記者が、東松島の訪問を元に執

筆した記事には、荒廃した東松島市の様子がそう綴られていた。「Preparing for THE INEVITABLE」不可避な自然災害というものに備える日本の姿がそう表現され、ジャマイカに伝えられた。国は違っても、自然災害に向き合わないといけない宿命は、どこも同じだ。6年経とうと、東日本大震災の悲劇が薄れることはない。悲しみと向き合いながら生きている人がいると思う。そうした人々に寄り添いながらも、これからの減災に向けて考えていけたらと思った。そして、そうした日本の現状から、少しでも海外に今後へのメッセージが伝わればと思った。

NHKに入局し、配属された先は高知放送局。南海トラフ巨大地震が起きれば、震度6強以上の揺れが予想され、4万2千人もの死者数が出ると予想されている場所だ。地域によっては、34mもの高さの津波が押し寄せることも予想されている。高知県は、被害を最小に抑えるべく県下をあげて防災活動に取り組んでいる。それだけでなく、防災技術を国内外問わずに発信している。11月下旬には、太平洋島嶼国の担当者が防災について学ぼうと、高知を訪れた。

一年前、他国の記者と東松島を訪れたことで私自身も防災・減災への意識

が変わった。そして、国内で起きた悲惨な出来事に、何年経過しようと変わらぬ辛さを抱えている人に想いを馳せながら、次起こるかも知れない災害にどう備えるかを、世界規模で考えることが大切なのだ、この研修に参加したおかげで気付かされた。いかに自分事としてとらえてもらうか、「減災報道」に貢献するべくできることを念頭に、仕事に取り組んでいる。



2017年の「太平洋・カリブ記者招待計画」に同行中の大高さん（右端）

駐ミクロネシア日本国大使の 声



駐ミクロネシア連邦特命全権大使

堀江 良一 氏

今年は、日本とミクロネシア連邦が外交関係を開設して30年になる。両国関係の歴史と現状について考えてみたい。ミクロネシア地域は、ほぼ赤道以北、日付変更線の西側に位置し、5つの独立国と米準州のグアム、米自治領の北マリアナ諸島からなる。このうち、ミクロネシア連邦、パラオ、マーシャル諸島の3か国と北マリアナ諸島は戦前・戦中の約30年間、日本が統治していた。3か国は、戦後の米信託統治領の時代を経て、米国とそれぞれ「コンパクト」と呼ばれる自由連合盟約を結んで独立した。

日本統治の名残は、多くの戦跡に加え、食生活や言語にも見られる。米、醤油、刺身はミクロネシア人の好物。「ジドウシャ」「デンキ」など彼らが今でも口にする日本語は実に多い。日本からの移民は1890年代に始まった。前大統領のモリ氏は高知県から移民した森小弁氏のひ孫だ。現在でも国民の約2割は日系人と言われる。

ミクロネシア人は、極めて親日的で、多くの人が日本統治時代の良さを

指摘する。この地域は当時、国際連盟委任統治領で、初の本格的な公教育が導入され、経済発展した。一方で、特に終戦前後は多くの住民が苦難を経験した。現地の女性と結婚した日本人男性が戦後、家族を残して日本に強制送還されたケースは数知れない。しかし、寛容な母系社会を基本とするミクロネシアに残された日本人の子孫たちは、母方の大家族制度の中で大事に育てられ、社会で活躍する人材に育っていった。政界、経済界で活躍する日系人は枚挙に暇がない。

日本政府は毎年、ミクロネシアから多くの若者を日本に招き、帰国後に感想文を送ってもらっている。そのうちの一人の女子学生の感想文が強く印象に残っている。「自分は祖父母から日本統治時代のひびきを聞き、日本は怖い国だという印象を持っていたが、訪日後、日本を好きになった。原爆の被害を受けた広島への復興にも感激した」という趣旨の内容だった。このような若い世代の交流はとても重要だと思う。

ミクロネシア連邦は1986年の独立時に米国と結んだコンパクトで、国防・安全保障を米国に委ねた。パラオもマーシャル諸島も同様だ。日本の南

に広がるミクロネシア地域の広大な海の平和と安定にとって、米国の関与は死活的に重要だ。法の支配に基づく「自由で開かれたインド太平洋」を維持していく上でも、極めて重要である。

ミクロネシアの当面の最重要課題は国家財政だ。改定されたコンパクトに基づき米国から多額の財政援助（現在は国家歳入の約35%）を受けているが、2023年に終了する。その後の自立的な国家経済運営に向け、日本も開発援助を継続していく必要がある。

日本は、1997年以来3年ごとに太平洋の島嶼国と首脳会議を開いており、第8回太平洋・島サミットは今年5月、福島県いわき市で行われた。首脳宣言には「今後3年間で5,000人以上の人材育成・人的交流の実施」も明記された。ミクロネシアを含む太平洋が「自由で開かれた」平和の海であり続けること、そして、若い世代を始めとする交流がますます活発化することを期待したい。

（2018年7月20日 読売新聞「論点」掲載）



ナントワス島からタウ島を望む（片岡撮影 2018）

シリーズ第4回

ミクロネシアの巨石文化

—世界文化遺産ナンマトル遺跡を中心に—

上智大学 客員教授
片岡 修

いよいよ最終回です。本号では、ナンマトル遺跡の研究の歴史、ユネスコ世界文化遺産登録の経緯や支援活動、今後の課題などを紹介させていただきます。ナンマトル遺跡を通して、文化財や遺跡の保護の大切さを少しでも感じ取っていただければと思います。

ナンマトル遺跡の研究史

西欧人によるポーンペイ島の発見は、1529年のスペイン船を指揮したサードラの目撃の可能性を除くと、1595年のスペイン航海士キロスに始まると考えられます（Sharp 1960）。230年後の1828年に寄航したロシアのルトケまで、ポーンペイ島と接触した西欧人は多くありません。1830年代に入ると捕鯨活動が活発化し、西欧人との接触が急増しました。1841年にはおよそ80人の西欧人がポーンペイ島に住んでいたそうです。

その後の各国の統治に伴い、航海士、キリスト教布教関係者、貿易関係者、旅行者、研究者などいろいろな人たちが、ポーンペイ島を訪れてきました。ミクロネシアの中央に位置するポーンペイ島で、巨大なナンマトル遺跡を目の当たりにした訪問者たちはびっくりしたに違いありません。

ません。その驚きと興味は、紀行文や民族誌や論文などに記録されてきました。中には歪曲や誇張だけでなく、又聞きの内容をもとに空想的な話に仕立て上げられたものまで出現しました。現在に至るナンマトル遺跡の記録を分類してみました。代表的な記録を見てみましょう。

第1期（1595・1849年）…ポーンペイ島発見以降の初期訪問者による記録

まず、西欧人としてナンマトルの第一訪問者となったアイルランド人のオコーネルをあげることができるよう。推定ですが1828年に遭難の結果ポーンペイ島に漂着し、1833年まで滞在したと考えられています（O'Connell 1836）。体験談には脚色や誇張された内容が含まれているため、その信憑性について議論されてきました（Riesenburg 1959）。1842年から1843年にかけて5ヶ月間ポーンペイ島に滞在した貿易商人のチェインは、ナンマトル遺跡について少しだけ記載しています（Cheyne 1853）。ナンマトルの記述として信頼できる初期文献の一つと考えられています。ところで、1840年に訪れたフランス人のロザメルが作成した航海図（Hambruch

まず、クバリー同様に広い学識を持ったイギリス人の人類学者クリスチャン（Christian 1899）についてお話ししましょう。彼は19世紀で最も詳細なナンマトル遺跡の研究を行った人物で、ナンマトル全体を調査し平面図を作成しています。ナントワス島の墓跡を発掘し、多量のビーズや貝殻などの遺物を採集しました。

次に紹介するのは、ナンマトル研究に避けられないドイツ民族学者ハンブルクです。1908年から1910年にかけて、ドイツ領のカロリン諸島の人と文化に関する資料を収集する目的で、ドイツ南洋探検隊の一員として派遣されました。彼のポーンペイ島に関する緻密で詳細な研究成果は、各400ページにのぼる3巻の報告書に集約されています。ナンマトル遺跡に関連する口頭伝承や、ナントワス島とポーンペイ島の発掘で見つかった貝製品や石製品など多量の遺物を報告しています。驚かされるのは、わずか12日で完成させたというナンマトル遺跡の略測平面図の正確さです（図1）。GPSによる平面図が出現する2015年まで、私たち研究者はハンブルクの平面図を使用していたほどです。

日本委任統治時代の研究は、八幡（1959）に代表されます。ナントワス島とポーンペイ島を発掘し、その成果を

1936）は、ナンマトル遺跡が描かれた最古の地図と考えられます。

第2期（1850・1885年）…詳細で科学的な記録のはじまり

この時期の大きな特徴は、キリスト教の布教に訪れた伝道師たちが、ポーンペイ島の文化や自然に関する記録を手紙や雑誌の記事に残していることです。とくに、ギューリック兄弟（Guilck 1857）の貢献は大きく、ナントワス島の詳細な記述と平面図を残しています。

この時期に紹介すべき重要人物がもう一人います。ポーランド生まれのドイツ人で、博物学者でもあり民族学者でもあったクバリーです。ドイツのゴッデフロイ博物館による南太平洋の資料収集の目的で、1873年にポーンペイ島を訪れました。大きな功績の一つは、それまでに存



写真1 コロニアのクバリー記念碑（片岡撮影 2018）

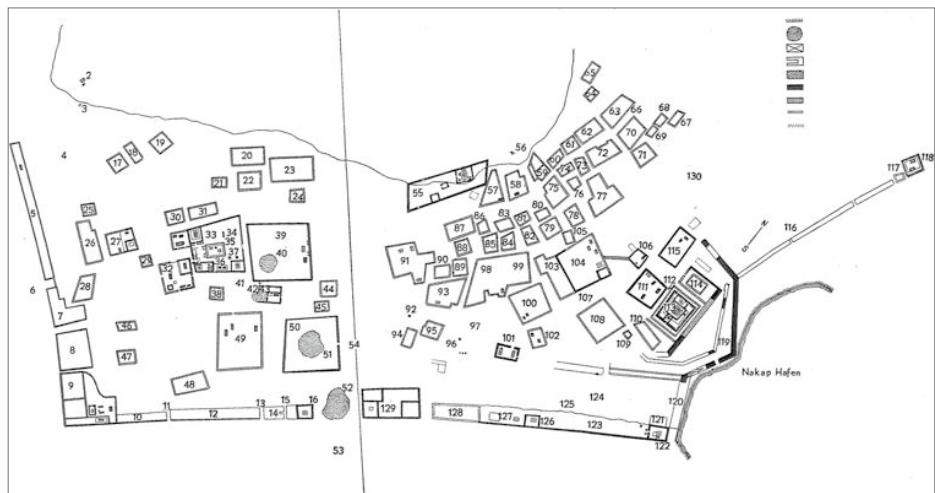


図1 ハンブルクのナンマトル遺跡略測平面図（Hambruch 1936）

いくつかの論文に発表していますが、調査報告書を公開することはありませんでした。

第4期（1946年・現在）…第二次世界大戦後以降の近代的な考古学研究

アメリカ信託統治領下の1963年に、スミソニアン研究所がイテート島の



写真2 タウ島の発掘風景
(片岡撮影 2005 国立民族学博物館所蔵)

発掘を行ない、ナンマトルで初めて炭素測定年代を発表しました (Radiocarbon 1968)。1970年代後半以降になると、アメリカによる文化財保護行政の一環として、ナンマトル遺跡の研究が急速に進展し始めました。1974年にアメリカの指定遺跡として登録されたナンマトル遺跡の範囲確認調査が、1978年にサックス博士らによって実施されました (Saxe et al. 1980)。

1980 - 1990年は、アセンス博士 (Athens 1981, 1985) とエアーズ博士 (Ayres 1993) を中心に、シャウテレウル王朝によるポーンペイ島の支配構造を明らかにするための本格的なナンマトル研究が展開された時期でした。1990年代には、ナンマトル遺跡の発掘が行われ

ることはありませんでした。2005年の筆者 (2006, 2007, 2008) の発掘調査は、日本人主体の調査としては75年ぶりとなりました (写真2)。一方2008年にエアーズ博士は、長大な外洋壁をもつアンギエル・カリアン島 (Angier-Karian) の墓跡の調査を実施しました (Ayres et al. 2009)。またセイケル氏 (Seikel 2011) は、埋葬遺構の形態や規模や副葬品の分析から、社会構造と埋葬行為の関係について研究を展開しました。2011年にエアーズ博士らは、再度ナンマトル遺跡の埋葬施設の研究を行っています (Ayres et al. 2015)。

2012年以降には、科学的なアプローチによる研究が進展します。たとえば、ナンマトル遺跡の建設に用いられた柱状玄武岩を、蛍光X線分析という方法で採石場が特定されました (McCoy and Athens 2012)。また、ナントワス島は4期にわたる建設工程で完成しており、紀元1200年代がピークだったことが明らかにになりました (Alderson 2013)。一方、従来の炭化物を用いた炭素年代測定ではなく、サンゴを使ったウラン・トリウム ($^{230}\text{U}/\text{Th}$) 年代測定という新しい方法で、ナントワス島のお墓が紀元1200年頃に築造されたことが判明しました (McCoy et al. 2016)。

遺跡の保存と活用の検討

1970年代後半以降のナンマトル遺跡の研究は、考古学だけでなく遺跡と周辺環境を含む景観の保護と保存を目的にした現状調査も、同時に行われてきました。それら先学の研究蓄積なしに、世界遺産登録の実現はなかったでしょう。少しみてみましょう。

1978年にナンマトル遺跡の範囲確認調査を実施したサックス博士らは、ナンマトル遺跡そのものを中核ナンマトル (Nan Madol Central)、遺跡や口頭伝承からナンマトル遺跡と関係のあるマトレーム地区の海岸地域のほぼ全域を大ナンマトル (Greater Nan Madol) と位置づけました (Saxe et al. 1980)。報告書でナンマトル遺跡の具体的な保全と、訪問者のアクセスの改善方法を提案しました。また、保護の観点から植物の伐採やマンガローブの除去の可否、訪問者が与える遺構への影響とその対策、ナントワス島の修復プロジェクトの立ち上げ、正確な遺跡図の作成、訪問者用のオリエンテーション・センターの設立、文化財保護法の策定を指摘しました。

1981年、エアーズ博士は遺跡保存の必要性から71の人工島の現状調査を行いました。各人工島の保存状況を観察し植物の繁茂状態、表採遺物の分布状況、シアムの企画分科会に、2017年に文化遺産の現状の把握と国際協力のための情報収集などを行う大洋州ワーキング・グループが立ち上げられたことです。

三つ目に、APIC (国際協力推進協会) が現地政府に展開している次のような支援をあげることができます。

- (1) 現地政府関係者を日本に招聘し、世界遺産関連施設や博物館を視察。
- (2) 小冊子『世界文化遺産ナンマトル遺跡』の発刊。
- (3) 遺跡の保護と管理と運営を担う、現地の文化財専門家の育成。
- (4) 学校教育用副読本の作成。
- (5) ナンマトル遺跡に設置の銘板や解説板などの製作。
- (6) ナンマトル遺跡の公式解説書や冊子の作成。



写真4 京都の宇治平等院の視察
(片岡撮影 2017)

遺構に悪影響を及ぼす要因とそのメカニズムを検討しました。要因として、周壁の玄武岩とサンゴの劣化、潮の干満と波の影響、大型樹木を含む植物繁茂、訪問者 (写真3) による影響、海洋あるいは陸生生物による攪乱を列挙しました。文化遺産として遺跡を持続的に維持するためには、確固たる保存計画が不可欠であることを指摘しています (Ayres et al. 1983)。

1991年に米国オレゴン大学のミクロネシア技術支援プログラムで派遣されたワーバ氏 (Wahba 1992) は、ナンマトル遺跡の保護と管理に関する企画を考案し、現地調査を実施しました。基本的にはエアーズ博士の調査方法を踏襲しており、20の人工島の現状調査を行いました。報告書には、推奨項目として遺跡の管理、



写真3 ナントワス島の訪問者
(片岡撮影 2012 国立民族学博物館所蔵)

(1) には、2017年にポーンペイ州のピーターソン知事、モセス連邦議会副議長、ウルセマル連邦議員 (元大統領) の日本への招聘があります (写真4)。2018年12月現在、ミクロネシア連邦政府文化財担当官のコーラー氏と州政府歴史保存局のレバーン氏の日本への招聘を調整中です。招聘が実現すれば、世界遺産関連施設の視察に加え、(4) (6) の具体的な検討を行う予定になっています (写真5)。(2) は、世界文化遺産としてのナンマトル遺跡の理解と、文化財の大切さを広く知っていただくための啓発活動の一環です。APICの会報誌に掲載された記事を冊子に編纂中です。(3) として、2019年3月にミクロネシア短期大学でナンマトル遺跡について講義を行う予定になっています。考古学の楽



写真5 連邦政府の文化財担当官と
打ち合わせ (片岡撮影 2018)

支援活動いろいろ

2011年の文化遺産国際協力コンソーシアムがユネスコ世界文化遺産登録

APIC 早朝国際情勢講演会



毎月1回開催される **APIC 早朝国際情勢講演会**では、外務省幹部、在外大使などを講師として、時局の外交課題や激動する国際情勢などについて講演が行われます。

現職の外務省局長、一時帰国中や退官直後の大使から、いま実際に進行中の国際情勢のテーマについて質の高い話を聞くことができる機会として、参加者からの評価は極めて高いものがあります。なお、APIC 維持会員の皆様には自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っております。詳細については、裏表紙に記載している APIC 事務局の連絡先にご照会ください。

APIC 役員名簿

【役員】

理事長	佐藤 嘉恭	(最終官職：駐中華人民共和国特命全権大使)
常務理事	佐藤 昭治	(最終官職：駐ミクロネシア日本国特命全権大使 (兼パラオ・マーシャル諸島))
理事	荒木 恵	一般財団法人国際協力推進協会 事務局長 (最終官職：財務省 国際局局付派遣職員 (アジア開発銀行))
理事	坂本 吉弘	一般財団法人安全保障貿易情報センター 理事長 (最終官職：通商産業省 通商産業審議官)
理事	炭谷 茂	社会福祉法人恩賜財団済生会 理事長 (最終官職：環境省 事務次官)
理事	芳賀 達也	一般社団法人太平洋協会 事務局長
理事	舟木 いさ子	ヤクモ株式会社 代表取締役会長
理事	村上 洋	味の素株式会社 社外監査役
理事	山本 達也	エーオンジャパン株式会社 代表取締役社長
監事	金成 憲道	ドイツ証券株式会社 上級顧問
監事	兵藤 廣治	兵藤税理士事務所 税理士 (最終官職：衆議院 大蔵委員会調査室長)

【評議員】

評議員	石堂 一成	東京コンサルティング株式会社 代表取締役社長
評議員	渋谷 健	コモンズ投信株式会社 取締役会長
評議員	島内 憲	元駐ブラジル連邦共和国特命全権大使
評議員	廣野 良吉	成蹊大学 名誉教授
評議員	本多 義人	東神インターナショナル株式会社 名誉会長

ザビエル 留学生 奨学金

対 象 ザビエル高校卒業生 毎年1～2名
留学先 上智大学国際教養学部、理工学部など
奨学金 卒業までの4年間の奨学金を授与

留学生を中・長期的に受け入れるためには、それにかかわる渡航費、入学金、授業料、生活費等とかなりの額にのぼることが見込まれます。皆様からのご協力をお願い申し上げます。

銀行振込先

三菱東京UFJ銀行 本店(店番 001) 普通口座 1660339
口座名 一般財団法人国際協力推進協会 奨学金募金口
カナ名 ザイ) コクサイ キョウリョク スイシン キョウカイ
※振込手数料はご負担をお願いしております。

◆「ご寄附のお願い」◆
「ザビエル留学生奨学金プログラム」は、上智大学の留学生基金の他、皆様のAPICへのご寄附により、2019年1月現在、総額約8,806万円お預かりいたしました。皆様のおかげで、留学生たちは上智大学で充実した生活を送っています。誠にありがとうございます。皆様に御礼申し上げますとともに、本留学生奨学金制度に更なるご支援をお願いいたします。

今後の課題

「危機遺産」登録の理由として、遺跡の管理と保護の必要性、観光資源マネージメントのための人材確保、危機管理の構築と観光インフラの開発、遺跡の保護政策の国際的支援など、管理と運営と制度の改善事項があげられていました。2018年1月に世界遺産センターとイコモス(国際記念物遺跡会議)が現状調査を行い、報告書には即時、短・中・長期を目標とした、遺跡の保護と修復とマネージメントに関する具体的な改善点が盛り込まれていました(The World Heritage Center and Icomos 2018)。

異なる分野の専門家による国際的な支援と現地政府との共同体制で、遺跡の長期的な保護に向けた管理体制の確立とマネージメント・プランの策定が急がれます。



写真6 ナントウス島を訪れた上智大学の学生たち (片岡撮影 2018)

しき、ナンマトル遺跡の重要性、文化財の大切さと遺跡の保護の必要性を感じていただくことが目的の一つです(写真6)。講座を通して、将来の専門家を目指す学生の支援ができればという構想からです。長期戦のはじまりです。

参考文献

- Alderson, H.A., 2013. *The Political Economy of Monumental Architecture at Nan Madol, Pohnpei, Federated States of Micronesia*. MA Thesis, University of Otago.
- Athens, J. Stephen, 1981. *The Discovery and Archaeological Investigation of Nan Madol, Ponape, Eastern Caroline Islands: An Annotated Bibliography*. Prepared for Historic Preservation Office, Saipan. Unpublished.
- Athens, J.S., 1985. *Nan Madol: Archaeology of a Pohnpeian Chiefdom Center*. Saipan: Office of Historic Preservation, Trust Territory of the Pacific Islands.
- Ayres, William S., 1993. *Nan Madol Archaeological Fieldwork: Final Report*. Submitted to Pohnpei State Historic Preservation Office. Federated States of Micronesia.
- Ayres, W.S., A.E. Haun, and R. Mauricio, 1983. *Nan Madol Archaeology: 1981 Survey and Excavations*. Micronesian Archaeological Survey Report. Historic Preservation Office: Saipan.
- Ayres, William S., Katherine Seikel and Maureece Levin, 2009. *Archaeological Remains at Angier-Karian, Nan Madol, with Supplemental Studies at Sokehs and Temwen, Pohnpei, Federated States of Micronesia*. MS on file, Historic Preservation Office, Pohnpei State, Federated States of Micronesia.
- Ayres, William S., Maureece Levin and Katherine Seikel, 2015. *The Archaeology of Nan Madol and Temwen Island Site Distribution, Architecture, and Early Agricultural Features Madolenihmw; Pohnpei, Federated States of Micronesia*. Submitted to the Pohnpei State Historic Preservation Office, and the FSM Historic Preservation Office Federated States of Micronesia.
- Cheyne, Andrew, 1852. *A Description of Islands in the Western Pacific Ocean, North and South of the Equator*. London: J. D. Potter.
- Christian, F.W., 1899. *The Caroline Islands: Travel in the Sea of the Little Islands*. Methuen: London.
- Gulick, Luther H., 1857. The Ruins on Ponape or Ascension Island of the Pacific Ocean. *The Friend*, 6(6): 57-60.
- Hambruch, Paul, 1936. *Ponape, Ergebnisse der Südsee Expedition, 1908-1910, 2, B, 7*, edited by Georg Thilenius. vol. 3. Hamburg: Friederichsen, De Gruyter.
- Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage, 2012. *Survey Report on the Present State of Nan Madol, Federated States of Micronesia*. 2010 Survey for International Cooperation Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage.
- 片岡修, 2006.『ミクロネシア連邦ポーンペイ島の先史時代に於ける首長制の理解に向けて - 巨石建造遺跡ナン・マドールの考古学研究 - ①』第36回三菱財団事業報告書 pp. 428-431.
- 片岡修, 2007.『ミクロネシア連邦ポーンペイ島の先史時代に於ける首長制の理解に向けて - 巨石建造遺跡ナン・マドールの考古学研究 - ②』第37回三菱財団事業報告書 pp. 353-355.
- 片岡修, 2008.『ミクロネシア連邦ポーンペイ島の先史時代に於ける首長制の理解に向けて - 巨石建造遺跡ナン・マドールの考古学研究 - ③』第38回三菱財団事業報告書 pp. 377-379.
- Kataoka, Osamu, Takuya Nagaoka and Tomo Ishimura, 2017. *Survey Report on the Preservation Status of the Megalithic Complex of Nan Madol and Sites on Temwen Island Pohnpei State, Federated States of Micronesia*. Submitted to the Office of Archives, Culture and Historic Preservation, FSM National Government and Historical Preservation Office, Pohnpei State.
- Kubary, John Stanislaw, 1874. Die Ruinen von Nanmatal auf der Insel Ponape. *Journal des Museum Godeffroy*, 3(7): 123-131.
- McCoy, M. D., H. Alderson, Richard Hemji, Hai Cheng, and R. Lawrence Edwards, 2016. Earliest direct evidence of monument building at the archaeological site of Nan Madol (Pohnpei, Micronesia) identified using 230Th/U coral dating and geochemical sourcing of megalithic architectural stone. *Quaternary Research*, 86(3): 295-303.
- McCoy, M. D. & J. S. Athens, 2012. Sourcing the Megalithic Stones of Nan Madol: an XRF Study of Architectural Basalt Stone from Pohnpei. Federated States of Micronesia. *Journal of Pacific Archaeology*, 3(1): 105-114.
- O'Connell, James F., 1836. *A residence of eleven years in New Holland and the Caroline Islands*. Boston: B.B. Mussey.
- Paszkowski, L., 1971. John Stanislaw Kubary — Naturalist and Ethnographer of the Pacific Islands. *Proc. Roy. Zool. Soc. N. S. Wales*, 16(2): 43-70.
- Radiocarbon, 1968. Ponape Series. *Smithsonian Institution Radiocarbon Measurements II*. p.253.
- Riesenber, S., 1959. A Pacific Voyager's Hoax. *Ethnohistory*, 6: 238-264.
- Sand, Christophe, 2017. *Field Mission Report Associated to the Conservation Strategy Project Allowing the Removal of Nan Madol (Pohnpei, Federated States of Micronesia) from the List of World Heritage in Danger*.
- Saxe, Arthur A., Richard A. Allenson and Susan R. Loughridge, 1980. *The Nan Madol Area of Ponape: Researches into Bounding and Stabilizing an Ancient Administrative Center*. Saipan: The Trust Territory Historic Preservation Office.
- Seikel, Katherine, 2011. Mortuary Contexts and Social Structure at Nan Madol, Pohnpei. *The Journal of Island and Coastal Archaeology*, 6(3): 442-460.
- Sharp, Andrew, 1960. *The Discovery of the Pacific Islands*. Oxford: Clarendon Press.
- The World Heritage Center and Icomos, 2018. *Mission Report on Nan Madol: Ceremonial Center of Eastern Micronesia*. World Heritage Committee, Forty-second Session.
- Wahba, Monique, 1992. *Nan Madol Preservation and Management Plan*. Submitted to the Division of Historic Preservation and Cultural Affairs.
- 八幡一郎, 1959.『ミクロネシア』『世界考古学大系』15: 128-163. 平凡社



APIC では維持会員（法人会員・個人会員）を募集しております。

APIC 維持会員の皆様には毎月開催される外務省高官、大使による **APIC 早朝国際情勢講演会**を自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っています。詳細につきましては、APIC 事務局にご照会ください。

場所 ホテルオークラ東京 会議場

時間 午前 8:30 ～ 10:00（朝食付き）

お問い合わせ

TEL : 03-5577-2900

FAX : 03-5577-2901

E-mail : apicinfo@apic.or.jp

■発行人

佐藤 嘉恭（理事長）

■発行日

平成 31 年 1 月 1 日

■発行所

一般財団法人 国際協力推進協会

〒101-0054

東京都千代田区神田錦町 3-15-6

名鉄不動産竹橋ビル 7 階

TEL : 03-5577-2900 / FAX : 03-5577-2901

MAIL : apicinfo@apic.or.jp

■編集

編集長

副編集長

APIC インターン生

芳賀 達也（理事）

加藤 奈美

斉藤 拓馬

喜多 萌子（津田塾大学大学院）

金原 弘恭（上智大学）

塚本 遼（上智大学）

中村 彩乃（津田塾大学）

西崎 奈央（上智大学）

平澤 碧惟（津田塾大学）

藤崎 優香（津田塾大学）

古川 真帆（津田塾大学）

古川実加子（津田塾大学）

森内みのり（上智大学）

良永うめか（津田塾大学）

渡邊 咲樹（上智大学）